

ゆっくりと、そして穏やかに沈んでゆくその姿は、水面にたゆたう桜の花びらに囲まれて、まるで水中に咲いた一輪の花のようであつた。

その表情には絶望も苦しみもないようにみえた。

しかし、その姿もやがて舞い上がった泥に閉ざされ、何も見えなくなった。しばらくして、死者に抱かれるのを確かに感じた。

一筋の魂が浮き出てきたからである。

「……………」

彩はそれをすくい取ると、自身が食らうのをグツと堪え、天へと放した。

「あなたは、自由よ……永遠に……」

そうして、手のひらから魂を解き放った。

それは野を舞う蝶のように。

風に舞う花びらのように。

空へ空へと舞い上がって……。

やがて、見えなくなつた。

日之出村妖怪奇譚
貳

Regulars



管狐

彩が使役している使い魔。
左から辰巳・疾風・凧。
真ん中の疾風がリーダーで、
左が跳ねっ返りの辰巳、右
が臆病だけど聡明な凧。
ずばらでいい加減な彩のよ
き補佐役たちである。



紗雪

北関東（主に毛野）に冬を
もたらす雪ん子。冬の間は
彩のいる日之出村に来て、
このあたリー帯の冬を司る。
春になると北に帰っていく。
冬の間は日之出村の土地神
も兼ねる。
時々天候の制御に失敗する
駆け出しの雪ん子。



彩

言わずと知れた白面金毛九
尾の狐。室町時代に封印さ
れ、現在は日本の神々の監
視下に置かれており、日之
出村という群馬の山奥の村
で土地神をやらされている。
大の酒好き、ずばら、自己
中といったところがない。



日之出村

群馬県北部にある廃村。す
でにダム底に沈んでいる
ため、現在は一部が標高120
0m 程の所に移された。
妖怪たちの村だが、『陸』と
『夕奈』という二人の人間
が住んでいる。
冬は雪に閉ざされる。



ルイーゼ

長野県にある空に浮かぶ街、
汐碕市の市長。明治時代か
ら財界の中枢に存在してい
たらしい。多くは謎に包ま
れているが、その正体は魔
法使いのようである。
日本の神々に彩を託された
ため、彩を監視する義務を
負っている。



凧

猫又。現在は長野県にある
汐碕市という街で鈴鳴屋と
いう雑貨屋（セレクト ショ
ップに近い）を営む。
鈴鳴屋はもともと日之出村
にある店だったのだが、ダ
ムの底に沈んだので汐碕市
に店を出した。

一、客人まれびと

雪に閉ざされた日ひ之出村に客が来ることはとても珍しいことである。

そもそもこの村は妖怪の住む村であり、人間は二人しか住んでいないからだ。

とはいえこの二人が生活するためには人界との接触は不可欠であり、この村への道は、当然、人界とつながっている。

だからこの村に人が来ると言うことは、ないわけではないのだが……。

「どうぞ……」

木訥ぼくどつで抑揚のない声とともに、ずっと緑茶が差し出される。

自慢さやまちやの狭山茶である。

「おお、かたじけのうございます」

相対するは齡よわいを七〇も越えたくらいだろうか。白髪を蓄たくわえた老人であった。前髪が多少後退してはいるものの、頭髮はしっかりとしていた。そして姿勢が良く、また齒も自前のままのようだ。この日之出神社に続く一〇〇段以上の石段を登って来られたのもうなづける健康状態だ。

「なんの用事？」

老人が一口お茶を口に付けて落ちつくのを待って、雪ん子の紗雪はこの妖怪の村に来た理由を尋ねた。

「ここは廃村とうかがっておりましてな……もしやこうした立派な神社がまだ残っておるとは想像もしておりませんで……」

老人は少し恐縮しながらも、社務所の中を見渡した。

「残っている。ただの物見遊山で来たの？」

「失礼……改めまして、私、佐田興業の吉野と申しましての……」

そう言って老人は名刺を取り出した。

そこには会社名とその社長秘書室付けの運転士となっていた。

とはいえその肩書きの意味を、紗雪がどこまで理解出来たかは疑問ではあるが……。

「佐田興業を興した佐田家はこの村から東に一山も二山も越えた集落出身でございましてな、当時の氏神を探していたところ、こちらにも廃村があると聞き参ったさいですじゃ」

聞けば佐田家はこの日之出村から東の方角にある相ノ倉山にあった万沢集落というところの出で、江戸時代に一財産をなし、今は前橋に本拠を構えているという。元の万沢集落はすでにうち捨てられ、山林の中に埋もれてしまっているらしい。

「コクコク」

と相手の会話に合わせて相づちをうつ紗雪ではあるが、内容のほとんどを理解していないのは

秘密である。

そもそも紗雪は代理の神であり、冬の間だけこの土地を任されているに過ぎない。

相ノ倉山がどこかも知らないし、その佐田家の発祥とされる万沢集落など知りようもない。

「で？ 用事は？」

だからなんだと言わんばかりに紗雪はつつけんどんに要件を尋ねる。

「この神社にまだ人がいようとは思ってもおりませんで……これは願ってもないことでして……佐田家がここまで栄えることが出来たのも、万沢集落の頃からお祭りしている氏神様のお陰。一つ、前橋の屋敷に社を建てることになりましたな」

聞くと、うち捨てられた万沢集落の周辺を巡って、氏神の遺物でもあればそれを祀りたいとのことだった。もはや崩れた神社の柱とか、石碑とか、なんでもいいらしい。

万沢集落の周囲を探索・調査していたところ、ここ日之出村の場所にも集落があることが解り、やってきたという事のようにだ。

「神社の方^{かた}がまだおられるなら話が早い。万沢集落のことをご存じではございませぬか？」

「なるほど……」

そこで会話がとぎれた。

代理神の紗雪には、この申し出をどう扱えばいいのか解らないのである。

ず……という茶を啜る音だけがしばし続いた後、紗雪はようやく深く頷くと、「神社の記録を

調べる」とだけ答えた。

これが精一杯の彼女なりの返事だった。

「おお、ご検討いただけますかいのう」

「でも過剰な期待は禁物」

紗雪は返答は確約できないと念を押すと、老人を村から送り出した。

老人は何度も頭を下げ、どんな些細なことでも良いからと言って山を下りていった。

* * *

来客を見送ってから、紗雪はふうと一息ついた。

それからついーと後ろを振り返って本殿がある方角を眺める。

神社の記録を調べるとは言ったものの、それがどこにあるのかはよく解らない。となると本来のこの土地の神に話を聞くしかないわけだが。

「いそいそ」

紗雪はまずは土間^{どま}に向かった。

鍋を火にかけ、おでんを作ることにする。

大根に出汁^{だし}が染み込^しんできたら、とっておきの肉まんを蒸す。

「これで完璧……！」

準備は整ったとはかりに深く頷くと、紗雪は社務所から出て拝殿に上がり込み、そのままスタスタと奥へ進んだ。奥には本殿とつながる封印がされている扉がある。それを何のためらいもなく開いて飾りの付いた取っ手を勢い良く引くと、一気に開け放った。

するとそこには一升瓶いっしょうびんを抱きかかえた巨大な狐が気持ちよさそうに寝ていた。

「彩先生……」

と紗雪がその狐を揺り起こそうと近づいたが……。

「うわっ！ さっぶっ!!!」

寝ていた狐が毛を一気に逆立てると、マツハの早さで本殿の扉が閉められてしまった。紗雪がぼーいと放り出される。

「……………」

あっけにとられる紗雪。

しかしここで引き下がるわけには行かない。

「本気、出す」

紗雪は目を細めると、周囲の温度を下げにかかった。冬をもたらす妖怪の本領発揮である。

一瞬のうちに周囲の温度がみるみる下がっていく。

空気中の水分が一気に凍って、周囲が霧に包まれる。気温はマイナス一〇〇度に達しようとし

ていた。

ちなみに紗雪は最近「絶対零度」という言葉を憶えたいらしい。これは宇宙の温度らしい。宇宙、かつこいいい！

「宇宙マイクロ波背景放射！」

テレビの教育番組で憶えたての言葉を技名のように発すると、その冷えに冷えた冷気を容赦なく本殿の中に送り込んだ。本殿は所詮、木造の建物である。隙間などいくらでもあろうものだ。すぐさまバーン！と扉が開かれると、狐が逃げるように飛び出してきた。そしてそのまま拝殿を突っ切り、隣の社務所に飛ぶように逃げ込んでいくのが見える。

しかし……。

「ひえうあうおおおおお……!!」

何を言っているのかよく解らない悲鳴が社務所から響いてくる。

それもそのはず、雪ん子である紗雪が住んでいる社務所の、しかも狐が本能的に向かった寝所が暖かいわけがないのである。

むしろそこは紗雪の冷気によって冷えに冷え切った極寒の部屋と化していたのだ。

「死ぬ、死ぬ……!」

ガタガタと震えながら四つん這いで——いや狐だからそもそも四つ足なのではあるが——居間の方へ移動すると、そこは先程まで紗雪が人間と会っていた場所だったので、まだ暖かった。

ここで狐はようやく冷静さを取り戻し、そもそも自分の力で温めれば良いのだと気付いて、炎を呼び出したのだった。

姿もいつのまにか人型になっている。

この情けない狐が、彩と呼ばれる、本来のこの土地の神であり、あらゆる創作物でも有名な九尾の狐である。もっともその自慢の尻尾は封印されているため、現在は六本しかない。

「お目覚め……」

ガタガタと震える彩の元に、ようやく紗雪がおいつた。

「な、な、な……!」

彩は何か文句を言いたいらしいのだが、それよりも寒さが勝^{まさ}っているらしく、紗雪を指さすまでが精一杯のようだった。

「あ———」

それから紗雪が入れてくれた熱いお茶を何杯も飲み干す。

「つたく、起こし方ってもんがあるでしょーが、起こし方ってもんが」

と言いながら、今度は目の前に出されたほかほかの肉まんをバクバクと食い漁る。

「おでんもある」

熱々おでん。

「ずいぶん準備がいいわね……」

とろとろにとろけそうな大根。

フワフワのはんぺん。

モチモチのちくわぶ。

がんも、ちくわ、ごぼう天、さつま揚げ。

「おお、じゃこ天！ こんな珍しいものが……はふー」

彩のご機嫌、急上昇中！

「けど、餅はない」

しかしその一言で、全てが消し飛んでしまった。

「なんですって!? お供え物の新米のもち米が確か……」

「全部食べた。おいしかった」

「貴様———!!! あれは春になったら食べようと楽しみにしていたのに!!」

「お正月にみんなで食べて、しまった。残念」

そういえば正月にはみんなで餅つきまでしたのに、ついた餅を彩にお供えもしなかったことを紗雪は思い出した。そしてそれは申し訳なかったなと思うものの、寝てたんだししょうがないよねという思いもあったりする。

「シクシクシクシク……」

まだ寒いのも相まって怒る気力がイマイチ湧かない彩は、ガツカリすると踵かかとを返して本殿に戻

ろうとした。腕にはしっかりと新しい一升瓶が抱えられている。

「まだ用事がおわってない」

すると、紗雪のその一言とともに部屋が氷の壁で囲まれてしまった。

再び冷気が部屋の中を襲う。

「もー、なんなのよ!」

「来客があつた」

紗雪はようやく、先ほどの来客の話を切り出した。

「はへ?」

彩は物珍しそうに目をパチクリとさせる。

「相ノ倉山、万沢集落、佐田家……そして聖遺物」

紗雪は先ほど聞かされた話を一通り彩に伝えた。聖遺物というのは紗雪が勝手に、氏神の遺物を仰々しくそう呼んだだけである。

「ふーん、この雪に閉ざされた日之出村に、人間の客ねえ……」

彩は少し訝しげにそうつぶやいたが、とはいえ心アタリはないわけでもなさそうな感じだった。

* * *

と言うわけで。

彩はそう前置きして紗雪を連れてきたのは、村にある大きな蔵だった。

「姐さんが真冬に来るなんて珍しいッス」

蔵を守っていたネズミの妖怪がへらへらしながら蔵の扉を開いた。

「あたしだって好きで来てんじやないのよ！」

彩は機嫌が悪いままのようだ。

「何かあったんで？」

ズカズカと中へ入って行く彩の後に残った紗雪に、妖怪が耳打ちする。

「わたしが無理やり起こした」

「あ、さいで。そりゃご機嫌ななめですわ」

「コク」とうなづくと、紗雪も彩の後に続いた。

中は少しカビ臭い。

しかし並べられている書物の状態は概ね良好おおむのようだった。

さすが和紙である。

「万沢集落の記録は、多分この辺にあるはず……」

彩はそう言いながらもハシゴに登って、ずらりと並んだ書物の中からいくつかを取り出して、確認していく。

この蔵に収められている書物とは、ここ上野国（群馬県）の廃寺や廃社、没落した商家・庄屋などから拾い集めてきた当時の戸籍や墓・土地の記録、さまざまな帳簿、小作人の記録、米の出来高、手紙のやりとりなどなどである。江戸時代以前の記録は寺や神社・地主などが独自に保管していた。それらは大事にとって置かれることも多いが、村落や寺社が消滅すると散逸してしまう。彩はそれらが潰れる（こぶ）たびにかき集め、自分の村に保管しているのである。

彼女は邪悪な妖怪ではあるが、人間よりも高等な知能と理性を持っており、記録を残すということに深い理解を示しているようだった。

従ってこの蔵にあるものは彩の収集物のほんの一部に過ぎない。本来の彼女の収集物は彼女自身作りだした別空間にある。簡単に言えばドラえもん、四次元ポケットのようなもので、そこには書物に限らず、今までさんざん悪さしたため込んだ金銀財宝・秘宝も所蔵されている。開運なんでも鑑定団に出せば、相当な値が付くものばかりだ。

ではなんで上野国の記録だけその別空間ではなく蔵に収められているかというと、それは彩がまだ封印されているからである。別空間には封印が解かれない限りアクセスはできないため、仕方なくこうして物理的な——そして彩にとっては原始的な——蔵の中に収蔵されているというわけである。

つまりこの蔵にあるものは、彩が封印されたあとに集められたものということになる。さらに言えば、彩を封印した側（日本の神々）からしてもそれは望ましいことである。という

のも彩のコレクションの中には、古代の魔術や秘術の叡智えいちに関わる書物もたくさんあり、もし彩がこれらを手にしたら、自力で封印を解いてしまう可能性もあるからだ。

「これで全部だわ。大した集落でもなかったから、資料も少ないわね」

彩はそう言いながらハシゴを下りて来た。その手には一〇冊ほどの古文書があった。

「佐田家はこの集落のいわゆる村長むらおさ的な存在だったっぽいわ。氏神はと……タヌキかー。まだ集落周辺にいたりするのかしら？」

「人間とはぐれたなら、俺らと合流してるんじゃないスカね」

あとから入ってきたネズミの妖怪が、ふとそんなことを言う。たしかにここ一帯の、特に居場所がなくなった妖怪たちは彩を頼って日之出村に集まっている。

「それもそうねえ……」

「ということは、佐田家についていった？」

紗雪が思いついたようにポンと手を打った。

「氏神か道祖神どうそじんとして憑ついてるかもしれないわね」

佐田家が未だに栄えているなら、それを支えている可能性があった。

「じゃあ、お社やしろを建てるといえるのは、間違っではないかい？」

「そうね、タヌキも喜ぶんじゃないかしら？ このご時世に」

「このご時世？」

「神様とか妖怪とかが否定されつつある今の世の中に、ってこと」
「なるほど」

と納得はしたものの、紗雪は少し寂しい気持ちでした。

別にこの世界は人間だけが暮らしているわけではないのに、人間に否定されることがなぜ寂しく感じたのだろう……？

「佐田家に行くんで？」

彩から預かった書物を元の場所に戻しながら、ネズミの妖怪が尋ねた。

「フフ、そうね、会いに行ってみようかねえ……暇だし」

真冬に起こされて何もせずに寝るのが悔しくなった彩は、欠伸あくびを一つするとほくそ笑んだ。

二、佐田家

二週間後――。

日之出村から一番近い駅、長野原草津口の地元食堂に彩と紗雪の姿があった。

この辺りの標高は六〇〇メートル。日之出村よりは五、六〇〇メートル低いせいか、雪もだいぶ少なかった。

「紗雪、お醤油とって」

「はい……」

いかにも昭和の、悪く言うと古くて掃除の行き届いていない店内で、彩は蕎麦を啜りながら目線は隣の刺身に向けられていた。

海のない県だというのに、お造りが置いてある。そこまでして魚食いたいもん？とか思いながらも、注文してるとか自問自答しながらマグロの刺身を箸で摘む。

一方、紗雪の前にあるのは鍋焼きうどんである。

「んー、まー、予想通りの味ね……」

などと言いながらもバクバクと食べる勢いは衰えない。

「あ、ちょっとその鍋焼きうどんのお汁飲ませて」

「はい」

「あー、あったまるわね。あたしもそちにすれば良かったかなー」

とか言いながらも蕎麦をずぞーっと啜る。

「出汁^{だし}の取り方が、少し雑……」

一方、紗雪はぼそりとそんなことを思った。

「ふふ、さすが陸に料理を教わってるだけのことはあるわね」

とか言いつつ時計をみると、約束の時間が迫っていた。

「先方にはあたし一人で行くから、見送ったら村に戻って大丈夫よ。あんまり神様が村を留守にするのもよくないしね」

「コク」

「で、今夜は前橋に泊まるわ。だから晩御飯は用意しなくて大丈夫よ」

「え？ 佐田家に泊まるの？」

「まさか!? 泊まる所はテキトーに探すわ。いまのご時世、旅館もホテルも泊まり放題だし」

「わかった」

それからお昼を食べ終わった二人は、店を出た。

外は晴れているが、寒い。

彩は細身の白のダウンコートには黒のセーター、スカートは同じく白で頭はワインレッドのロシア帽っぽい毛の帽子をかぶっている。足許も赤系のブーツだ。これはおそらく巫女装束の紅白を意識したものだと言測される。

一方、紗雪はいつも通り白の振り袖。もっとも雪ん子である紗雪に寒さはまったく関係ないので、この格好で寒くないのかといった心配は杞憂でしかない。

線路沿いの道を歩いて駅まで戻ると、ロータリーに大きな黒塗りの車が停まっているのが目にとまった。こんな田舎には不釣り合いな車だ。

「アレっばいわね」

彩は紗雪に前を歩かせた。というのも佐田家と直接接触したのは紗雪だけからだ。

車の前には日之出神社まで来たあの老人が立っていた。老人は駅の入り口の方に向かって立っているため、ロータリーの脇から出てきた二人にはまだ気付いていなかったが、ほどなくして紗雪に気付く、深々と会釈を……しようとしたところで、一瞬固まったのを彩は見逃さなかった。

「フン……」

その様子に彩が不満そうに鼻を鳴らした。やっぱりね、といったような感じだった。

「待たせた……」

紗雪がまず声をかける。

「こ、この度はお呼び立てして……も、申し訳なく……」

老人の声がうわずり気味に挨拶してきた。

「こちらは日之出神社の宮司^{ぐうじ}。わたしの上司」

「初めまして、過日^{かじつ}は留守にしております……失礼致しました。彩と申します」

にっこりと笑って、彩は軽く会釈した。

「さ、左様^{さよう}でしたか……わざわざ来ていただき、お礼の言葉もございません」

老人が恐縮そうに深々と頭を下げるが、その動作はともぎこちないものだった。

が、彩は気付かないフリをした。

「それじゃ、村のことはまかせたわ」

「コク」

そういうと彩は老人に誘^{いざな}われるままに後部座席に乗り込んだ。

車が音もなくすると動き出す。紗雪は自動車というものを知ってはいたが、コイル泣きの音を聞くのはこれが初めてだったらしく、聞いたこともない音に不思議そうな表情で走りゆく車を目で追った。そして、見えなくなるまで見送ってから、紗雪は日之出村に戻った。

一方の彩もしばらくは外を眺めていたが、運転士がチラチラとルームミラー越しに彩の様子を伺っているのいい加減嫌気がさして、口をひらいた。

「怖がる必要はないわ。別にあんたたちをどうこうする気は全くないから」

そして後部座席でふんぞり返って、ニヤニヤ笑う。

そう、この運転士である老人は人外だったのである。

そもそも雪に閉ざされた日之出村に老人が一人で来るなど簡単なことではない。にもかかわらず、この老人が何の助けもなしに來られたということは、それは即ち人間ではないだろうという予想を彩はしていたのだ。

一方の老人も、雪ん子の小娘が來ると思っていたら歴史に名を残している大妖怪が出てきたので、恐れあまり震えてしまったのである。

「だから、あんたのこととも聞かないわ。ただ、打ち捨てられた集落の末裔がどうなったのか、ちよつと知りたくてね。ほんと、それだけ。だからお互い詮索はナシにしましょ」

「承知いたしました」

まだ少し震えた声で、運転手は答えた。

「ふふ、でもちよつと嬉しいわ。あたしの知らない妖怪に会えたことに」

今やこの世界は人間が蔓延^{はびこ}っている。妖怪がいられる余地はどんどんなくなっているように見える。

だから、こうして他の妖怪に会えることが、彩はなんとなく嬉しいようだった。

* * *

佐田家の屋敷は前橋市の官庁街より少し東寄り、赤城山あかぎさんからは南西にあった。

そこが山手と呼ばれるかは解らないが、古民家も数多く残り、歴史あるエリアのようだった。屋敷は高い堀で囲まれ、数メートルおきに監視カメラ。なんとも物々しい雰囲気だ。

車は大きな門をくぐり、これまたゴツイ駐車場に入ると、黒ずくめの男達が彩を出迎えた。中に通されても黒服の男が彩の背後につく。

中庭に面した長い廊下を渡ると、応接間に通された。

大きなソファと値段の高そうな調度品が並んでいる。そして南側の天井には立派な神棚、その周囲には佐田家とは異なる家紋と、その下に佐田家の家紋が飾られてあった。

彩は一瞬眉間にしわを寄せると、ヤクザ事務所かここは……と心の中でつぶやいた。

おそらく佐田家ではない方の家紋は佐田家の上位団体の家紋だろう。群馬かもしれない。大きなエリアをカバーする組のものかもしれない。

佐田家は暴力団の二次団体か何かなのだろうか？

「おー！ ようこそおいでくださった。遠いところから感謝する」

などと思案していると、四〇代後半くらいだろうか、大柄で和服を来た男が入ってきて彩に握手を求めて来た。

もっと強面こわもてが出てくるのかと思ってたら意外と物腰の柔らかな人間だったので、彩は少し肩透かたすかしを食らった。

彼が佐田家の大旦那、いわゆる現在の当主であると言う。

遠いところからって、同じ県内なのに……と彩は思いながらも握手を交わす。

それから持って来た万沢集落の古文書の類を手渡した。

「弊社にあった万沢集落の帳簿の記録と、こちらは年貢の記録です。佐田家が記入したものもございます」

彩は持って来た紫の風呂敷を広げると、古文書を恭しく大旦那に手渡した。

「おお……」

大旦那は興味深そうに古文書をパラパラとめくったが、読めないことがわかると少しがっかりしたようだった。もっともこれらの書物は、学者でしか読み解くことは不可能だろう。

「これらは万沢集落にあったもの。元の場所に戻ったと思えば、私も気が楽というものです。ともに奉納くだされば」

そう言って彩は深く頭を下げた。

「いやいや、頭を下げるべきはこちらですよ。まさかこんな古い書物が残っているとは……正直驚きです。しかも万沢集落の記録ともなれば、我が佐田家が前橋に来る前の記録ですからなあ。大切に社に奉納させていただきますよ」

大旦那はそう言って、嬉しそうに彩の両手をしっかと掴んだ。

「そうだ、ついでに少し佐田家のこともお話しましょう」

天明^{てんめい}の大噴火（一七八三年）の時、寸断された橋や道路をいち早く修復し、物流を復活させるのに一役買ったのが、この佐田家の人間だったらしい。その復活させた物流網を生かして藩に膳立てして財をなしたのだという。

物資を運ぶすがら、周囲に分け与えたことで佐田家の名声は高まったとのことだった。それから前橋の地に根を下ろし、物流業・卸業^{おろしぎよう}を営んで今に至るらしい。前橋市が県庁所在地なのも佐田家が誘致に努力したからとか、この街は佐田家が大きくしたとか、大仰な話が続く。

その話しぶりからすると、どうもこの佐田家自体が暴力団というわけではないようだ。ただ無関係でもないようだ……自身の紹介に暴力団との関係を披露することなどあるわけもなく……。「そうだ、社を見ていきませんか？ まだ作りかけですが立派に仕上がっておりますな」

「ええ、是非^{ぜひ}」

彩はそう答えると、その社に祀^{まつ}られることになった当のタヌキはどんな奴だろうと、再度あの立派な神棚を見上げた。

そこには……恐怖のあまり打ち震えるタヌキの姿があった。

まあムリもない。佐田家が自分の社を建ててくれると喜んでいてところに乗り込んできた神職というのが、神主でも巫女でもない、最強最悪の妖怪だったのだから。

そんなタヌキの姿に、彩はにっこりと笑顔をかけてやった。

するとタヌキはさらに恐れおののいて、びゅーんと応接間から逃げていった。

「では、どうぞこちらへ」

大旦那に案内されるままに彩は廊下に出ると、庭に面した通路と縁側を兼ねた広縁こうえんに案内された。もちろん黒服の男達も一緒に着いてくる。

目の前に広がる庭はとても手入れの行き届いた日本庭園だった。緑の松とそして石に生えたコケが見事なコントラストを描き、中央には陽の光をキラキラと照り返す大きな池も見える。池の向こう側はちょっとした林のようになってるのが見える。

とにかく敷地がとてつもなく広いことに、彩は感心した。佐田家は本当にこの地で成功しているようだった。

「あら？」

彩は池の畔ほとりに何かがあるのに気付いて、そちらに向かおうとした。すると例の運転手が大旦那のところに来て、耳打ちするように話しかけた。わかったすぐ行くという小さな声が彩の耳にも届いた。

「ああ、彩殿、ちょっと弁護士から連絡がありましたな。しばし時間をくださいませんか。庭は広いですし、自由にみていただいて構いません」

「ええ、お構いなく。少し散歩させてもらうわ」

「ゆっくりと散策なさってください。社はあの池をぐるっと右手に回るとありますから」
大旦那はそう言うのと、少し早足で運転手や黒服たちとともに屋敷の方に去って行った。

彩は大胆那が屋敷の中に消えるのを見届けてから、先ほど気になった池の畔に行ってみた。するとそこにはとても弱々しい残留思念とても言おうか、負の感情を持った気の塊のようなものが水面を漂っていた。

それは水たまりの上に油を垂らした時のような、そんな漂い^{ただよい}方に似ている。

悲しみと悔しさを感じ取れた。年の頃はおそらく二〇代前半。しかし魂ではない。この場所では何らかの衝撃的な何かが起きたのだろう。その時の感情が残っている……というのが解りやすい表現かもしれない。

「ふむ……」

ということとはつまり、この池の中にこの残留思念の主——つまりご遺体——が沈んでいるのであろうことも容易に推測できた。

「名家にしては、穏やかじゃないわね。あんた、なにやってたの？」

彩は自分の背後からそーっと近づこうとしていたタヌキの方に振り返ると、につこりと笑った。
「ひいっ！」

という短い悲鳴が聞こえたが、彩の視界に飛び込んできたのはタヌキではなく、錦鯉^{にしきい}が踊ったド派手な着物に身を包んだイケメンだった。その顔は端正でスラリと伸びた鼻、キリツとした口元、そしてスタイルも抜群だった。

「なにそれ……」

化けるのはタヌキの得意技の一つではあるが、彩には簡単に見破られてしまった。

「フン、見た目で誤魔化したって意味ないわよ」

そういつて彩が軽くその美男を小突くと、タヌキは仕方なく元の姿に戻った。

なんともさえない、少しみすばらしいずんぐりとしたタヌキだ。

「あら、そっちのほうが、可愛いじゃない？」

さえないタヌキの姿を見て、彩はクスクスと笑った。

「へ、へえ」

照れているのかなんのかよく解らないが、タヌキはそんな生返事を返した。

イケメンに変身して少しでも彩の機嫌をとろうとしたのだが、その作戦は失敗に終わってしまっただ。

彩は真顔に戻ると、ぐるっと庭とそして屋敷を見渡した。

そこには相変わらず手入れの行き届いた広い日本庭園が広がっている。

「まあ、あんたにしてはよくやった方じゃない？」

佐田家を榮えさせるために、このタヌキはずいぶん頑張ったようだった。狸といえは奸智の達人であり、他を騙して出し抜くことに長ける。しかし、所詮は山の中のタヌキ。その力が發揮されるのは飽くまでも里山まで。都会まで降りてくると、勝手が違うはずだ。

「へえ」

「どうやら佐田家を栄えさせるために、多くの他人を不幸に巻き込んだようだった。

「ま、妖怪だから別にそれでもいいんだけどさ」

しかし不幸にした相手にも加護や妖怪が憑いている場合がある。佐田家はそれらを力尽くで排除して成り上がってきたのだ。

「社を建てようと思ったのも、当然のようね」

おそらく今の佐田家の状態は、よろしくないのだろう。

「何もかも、お見通しで……」

タヌキが深くため息をついた。

「分不相応ってやつね、だいたいこんな大きな街に来たら、あんたより強いヤツがいくらでもいるでしょうに……」

「へえ、金持ち喧嘩せずと言いまして……」

都会の妖怪・加護者たちには彼らのやり方というものがある。いきなり手を出してボコボコにするというようなストレートなやり方はしない。一方の田舎から出てきたタヌキは、売られた喧嘩は買うし、邪魔なモノは力尽くでも排除する。

その文化の違いが、最初は佐田家を快進撃に導いたのだが……。

「あとからあとから呪いを掛けられて……にっちもさっちもいなくなりましたわ」
タヌキは肩を落とした。

「よく殺されなかったわね……」

「へえ……それはおいらも必死だったんでさあ……」

必死に抵抗して多くの人を不幸にし、死にも追いやった。その負の感情や呪い、怨念がこの佐田家にはまとわりついているのである。

これらを払うことはこのタヌキにはできないようだった。

「ついに詰みですわ」

うな垂れたタヌキは、佐田家の現状を彩に吐露した。

実は経済的にはとても成功しているのだという。しかし跡継ぎが問題だった。

二人姉弟なのだが、若旦那に当たる長男は成人しているにもかかわらず完全に引きこもり状態で、性格もかなりの内弁慶。姉である長女は発達障害でそもそも表には出せないのだと言う。

「今の時代、座敷牢に入れておくわけにも行きませんで……」

「当たり前でしょ、何言ってるの？」

「へ、へえ」

「ここに来て、呪いがようやく成就し始めたってことかしらね」

「跡取りがこの状況では、佐田家を継げる者がおりまへん」

「親戚はどうなの？ 跡取りになるようなのはいないの？」

「財産目当てのロクなやつしかおらんですわ」

「やられまくってるわね」

「うう……」

などと話していると、この庭園に面している広縁をとぼとぼと一人の女性が歩いているのが見えた。なんとも頼りないフラフラとした歩き方をしている。

「あれが長女、姉の方ね」

「へえ」

年のほどは二〇代後半だろうか。身長は一六五センチくらい。痩せ気味で頼りない体なのだが、着ている服や髪型が妙に少女っぽい。丈の短いフリルの多いワンピースに生足は剥き出し、髪型は少女っぽいお下げで髪飾りてんこ盛り、化粧もビビットな色使いでアイドルとかなんかそんな感じをイメージしているようだ。

「変なシユミしてるわね。地は悪くないのに、服装も化粧も髪型もなんか合っていないわ」

少女趣味過ぎる。オシャレをするにしてももっと大人っぽい格好の方が彼女には似合うのに……と彩は思った。

「あれはぼっちゃんの趣味でして……あの子はぼっちゃんの着せ替え人形みたいなもんですわ。右も左もわからないのをいいことに好き放題ですわ」

「なるほど、あの格好は若旦那の趣味って事ね」

などと話していると、その女性が彩に気付いたらしく、庭の方を向いてにかーっと笑ってお辞

儀をした。その表情はなんとも言えなかった。もてなしての笑いなのか、諦観ていかんの笑みなのか、ただ単に何も考えてないのか。

だが彼女の瞳の中に、得も言われぬ黒い影を彩は読み取った。

「外道」

「え？」

「着せ替え人形どころじゃないじゃない」

「えっ、あっ……」

タヌキがしどろもどろになる。

彩は彼女が若旦那の性の慰みモノになっていることを見抜いた。当の本人がちゃんと理解できないのをいいことに好き放題やっているようだった。

「水子みずこの霊が見えるわ。一、二、三人も殺したのね」

「当たり前ですわ、三回妊娠させて、三回とも墮おろさせてますわ」

「あー、胸くそ悪い」

「もう手詰まりなんですわ」

大旦那もあの二人に見切りを付けて他の女と子供を作ろうと不倫をして、揉めに揉めているところらしい。

「あほらし。だいたいそれもあんたが焚たき付けたんでしょ？」

「へ、へえ」

「後先を考えなさいよ、後先を。狸のくせに頭悪いわね！」

「正妻せいさいを病死させればいいと思ったんでさあ」

タヌキはしれっとそんなことを言う。妖怪にしてみれば、人の命なんてものは確かにそう考慮することではないのかもしれない。

この短絡思考が！と、彩は心の中でこの目の前のタヌキを罵ののしった。

「まったく……どれ、少し話でもしてみようかねえ」

彩は自分に向かってまだニコニコしている女に近おびづこうとした。すると女は急に血相を変えて、怯えるように走って引ッ込んで行ってしまった。

「えー……な、何よアレ？」

「へえ、アレは時々あっしが見えるらしいんですわ」

「あら、そうなの？」

「しかも、化け物かなにかに見えてるようで……あっしを見付けるとああやって逃げ出してしま
うんでさあ」

「嫌われてるわねえ」

「世が世なら、さっさと始末してるところですわ。あんな出来損ないは、生まれてこなければよ
かったんでさあ」

「……」

その短絡思考が今の状況を作り出してんだよ、このうすらトンカチが！

と罵る前に、彩はタヌキをぶっ飛ばしていた。

「ひ、ひい……！ も、申しわけありません……！」

「謝る相手は、別にあたしじゃないわ。だいたいあの子がああなったのは、あんたの悪行のせいじゃないの！」

そういつて今度は蹴りも食らわす。

「グボォ……」

急所に入って、タヌキはのたうち回った。

「殺しやしないわよ、佐田家には大事な氏神なんだから」

「あっしだって……あっしだって一生懸命だったんでさあ……」

息も絶え絶えになりながら、タヌキはぼろぼろと涙を流した。

「ま、そこは同情するわ。あんたが氏神をするメリットも、今となってはなさそうだしねえ」

タヌキが佐田家の氏神になっているのは、ただ単に妖怪として生きるためだ。

長寿だったのか、それとも何か他の作用があったのかは解らないが、妖怪になってしまった以上、そしてその力を維持する以上、人の魂がいる。人を喰らわねば、結局野垂れ死ぬこと^{のた}に変わりはない。

だから佐田家に付いていったのだろう。

もっとも、地霊や動物たちの霊だけでつましく山に住み続けることもできないのだ
が……妖怪となった当時の浮かれたタヌキに、それを選ぶのは難しかっただろう。

「狐様……あつしはどうすれば」

ついにタヌキは彩に縫^{すが}りついた。

「氏神やめて山に帰れば？ 今すぐ万沢集落に逃げ帰ったって、佐田家の運命はもう変わらない
と思うし」

呪いはすでにタヌキでは防ぎようがない。

それならば今ここでタヌキが氏神を放棄したところで、佐田家は呪いに飲み込まれて消滅して
いくだけだろう。

「ええ……？」

彩の答を、タヌキは予想していなかったようだ。

ダメ元で頼んだことから、怒られることは覚悟していたが……まさか逃げろと言われるとは。
「たといあたしがあんたに同情したところで、力も貸せないしね」

「なんてです？ 狐様なら、こんな呪い、あつと言う間に……」

と言うタヌキに、彩は人差し指を振ってノーを伝えると、顔を上げた。

「だって、ほら、外を見てご覧よ」

彩はタヌキと会話をするために屈かがんでいたのだが、上体を起こしてぐると外を見渡す。すると塀の外には、いつの間にかたくさんちみもうりようの魑魅魍魎達が集まって、じっと彩とタヌキを見つめていた。

「う……！」

前橋中の妖怪や守護者たちが、彩とタヌキの様子をうかがっているのだ。

彩という歴史にも名を残している大妖怪が、この街の、しかも嫌われ者の佐田のタヌキの所に来たとなれば、これは大ニュースだ。

もう少しで佐田家を滅ぼせようと言う時に、大妖怪が手を貸したらと気が気ではないのだろう。

「あたしが佐田家に力添えしたら、もっと不幸が降りかかってくるかもしれないわよ？」

彩はそういつて笑う。

「はは……はははは……」

タヌキも乾いた笑いしか出ないようだった。

「だから諦あきらめなさいな。余生を過ごせる場所はあるんだし」

万沢集落はうち捨てられたままだ。タヌキが帰ってきてても、文句を言う者はいないだろう。

「ぐうの音ねもでまへん」

「それよりもさあ、ここに沈んでるご遺体は誰なの？ そんなに古いものじゃなさそうだけど」
彩はようやく自分の知りたいことが切り出せた。

水面を緩やかに残留思念が漂っている。残留思念が残っていると言うことは、まだ死んでそんなに時間が経っていない証拠だ。

「え……」

「まあ言いたくないなら別にいいけど。どうせ、こいつの魂も食ったんでしょ？」

「へ、へえ……」

タヌキはどうにかして取り繕う^{つくろ}としたが、そんなことをしても目の前の狐には無駄であると思
い直した。

「坊ちゃんがストーキングしていた女ですわ」

「何？ 姉だけじゃなくて他の女にも手え出してたの？」

「それが叶わず、カッとなって殺しちまったんでさあ」

「アホくさ。よく警察沙汰にならなかったわね」

「そりゃ揉み消すのは大変だったでさあ」

「なるほど、ヤクザを使ったのね」

佐田家のコネクションを使ってねじ伏せた。

が、自分の庭に埋めるのとはどうかと彩は思った。

ヤクザなら誰にもバレない死体の処理方法を持っているものだ。

「ふん、若旦那はあたしたち物の怪^{ものけ}並みの人非人に育ったようだねえ」

「自己中の塊でさあ」

「おまえが言うな」

「へえ」

「その都合の悪いことを生返事でやり過ぐすクセ、直した方がいいわよ？」

「へ、へえ……」

ったく。

見た目は立派だが、佐田家はもう中身はボロボロだというのが彩はイヤというほど理解した。呪いは正しくしかも人間からは解らないように機能し、このまま佐田家は滅びるだろう。佐田家そのものが経済的には成功しているのもポイントだ。人間に気づかれないようにさせるカモフラージュという側面はあるが、おそらく佐田家が成した財を、呪った連中は狙っているのだ。

「彩殿、ほったらかしにして申し訳ない」

そこへ佐田家の大旦那がようやく戻ってきた。

例の不倫問題で弁護士と何かあったのだろうと彩は推測した。

「いいえ、お構いなく。当主がお忙しいことは聞いておりましたから」

「いやいや、お呼びしたのはこのわたしですから。社は見学なされましたかな？」

「ええ、とても立派な作りで、氏神様もさそやお喜びと存じます」

彩は見てもいないのにテキトーなことを返した。

「おお、おお、ありがたい言葉。宮司様からそう言うってくださるとは、心強い」

だが大旦那は上機嫌になって、何度もうなづいた。

「ここでお会いできたのも何かの縁、落成式の祝詞のりとを是非彩殿ぜひにもあげていただきたい」

「私が？」

「そうです、我が佐田家発祥の地の遺構を持ってきてくださった彩殿に祝詞をあげていただければ、佐田家繁栄は間違いのないでしょう」

大旦那はそう言うと、分厚い封筒をそつと彩に忍ばせてきた。

厚さは三センチ以上ある。

「畏かしこまりました」

彩は恭うやうやしくその封筒を受け取ると、即座にその場で中身を取り出した。その行為に場の雰囲気が一瞬で凍り付く。大旦那も、その隣りにいた運転手も驚きを隠せずに目を見開いた。

しかしそんなことはお構いなしに彩はにつこりと笑うと、封書から出てきた三つの札束のうち二つを大旦那へ返した。

「一つで充分でございます。その二つは是非、お社のためにお使いください」

「お、おお、そうでしたか。相場というモノがわかりませんでな」

「こちらこそ、無礼をお詫び致します。ですがわたくしには……一つで充分でございます」
そう言って深く頭を下げた。

三、前橋

大旦那に見送られて玄関を出ると、例の運転手が姿勢正しく彩を待っていた

「送るのはけっこうよ。せっかく街に来たんだし、少し遊んで帰ることにするわ」

「左様でございますか、では前橋の駅まではお送りいたします」

「ああ、そうね……頼むわ」

たしかにここから繁華街までどれくらいあるのか、彩は調べていなかったことを思い出すと、運転手の提案を聞き入れた。

とは言え……佐田家の屋敷から前橋の駅までは、車だと左程遠くないようだった。

一〇分も走れば商店が増え、交差点の隙間からアーケードが見えた。

「この辺でいいわ」

彩はそう言うと、大きな四車線の道路で車を駐めさせた。

「大旦那には改めて礼を言っていたと伝えてくれる？ 落成式も楽しみにしていると」

「かしこまりました」

「それじゃあ、失礼するわね」

彩はそう言うとき車を見送りもせず、さつき見えたアーケードに向かって歩き始めた。運転士はそんな彩の姿が消えるまで見送ると、最後に礼をしてからようやくその場を離れた。

「疾風」

アーケードに入って使いの管狐くだぎつねを呼び出すと、いきなり空中からポンと小さな白狐びゃくこが現れる。

「はいはい」

「なんかいい宿あった？」

「どうやら泊まる宿を探させていたようだ。」

「高級ホテルから老舗旅館まで、なんなりと」

「どこも閑古鳥かんこどりつてわけね。なんか、妖怪が棲み着いている宿がいいわね」

「左様ですか、それでしたら……」

などと話しながら歩いていると、その彩の後ろには魑魅魍魎しめいろうろうの列が出来ていく。もちろんそれは人間には見えない。

この前橋に巣くう、守護霊やら妖怪やらなんやらかんやら。佐田家に恨みをもつ者達だ。あの佐田家に九尾の狐が何をしに来たのか、心配で仕方がないのである。もし彩が佐田家の肩を持つものなら、今までの呪いはすべて水泡に帰す可能性が高い。

もちろんその列に彩が気付いていないわけもなく……。

「あ？」

彩がめんどくさそうに振り返ると、行列はピタツと止まる。そして彩の視線から目を逸らす。彩が歩き出すと、またゾロゾロと後をついていく。

まるでだるまさんがころんだをしているかのようだ。

しかし彩に直接話しかける勇氣のある妖怪はいないようだった。

「鬱陶^{うつとう}しいなあ……」

と彩は後ろに聞こえるようにつぶやいてもう一度振り返ると、魑魅魍魎^{ちみりやう}どもの中に老舗旅館に取り憑いている妖怪を見付けたので、これは都合が良いと手招きした。

「今夜はあんたん所に泊まるから、準備して来なさいな」

それを聞いた妖怪は一瞬目を見開いてびっくりしたが、すぐに小躍りするように空中を何回転かすると、一目散に自分の宿に向かって飛んで行ってしまった。

疾風がすかさずその後をつけていく。場所をきちんと確認するためだ。

彩の泊まる場所が決まると、またひそひそと妖怪同士で会話が始まる。

なんでアイツなんだとか、ウチの方が広い部屋を用意できるとか、いやいや、希代の妖怪に目をつけられてあの本陣も終わりだななどなど。

「ごちゃごちゃとうるさいわねー」

彩が振り返ると、ぴたっと静かになる。

しかし彩が歩き出すと、また後ろでざわざわざわ。

宿に着くまでずっとこれが続くのかと彩はウンザリすると、もう一度振り返って後ろを付いてくる魍魎魍魎どもを見渡す。

「うるいさいから、おまえらも先に宿に行行ってくんない？ 夜になったら、いくらでも話を聞いてあげるわ」

すると妖怪どもは我先にと宿屋めがけて飛んで行ってしまった。

「ったく……」

取り巻きがいなくなつてせいせいすると、彩は独り、おそろく駅の方角へと歩き始めた。

前橋は彩にとっては初めて来る街だ。

活気は……よく解らないが、上野国を含む毛野けのというこの辺り一帯は東日本の中でもかなり早くから大和王権——天皇家——と関わりを持っており、彩が暗躍していた平安く室町時代にはすでに異国の地という感じはしていなかったのを思い出す。

だから朝廷を追われたとき、逃げてきたわけで……。

というネガティブなことも思い出す。最終的に隣の下野国しもつけのくに（栃木県）で封印されるのだ。

『なんかそう思うとムカついてきたわね……』

彩は昔のことを思い出すのをやめ、そこここと気になる商店があると冷やかしに入ったりしながら佐田家について考えを巡らせた。

佐田家については、一つ気になることがあるのだ。

大旦那は天明の大噴火の時に佐田家が活躍し、そして財をなして前橋に來たと言っていた。今から二四〇年くらい前のことだ。タヌキの悪さがどれだけひどかったのかは解らないが……二四〇年もあったらとくに佐田家は呪い殺されていてもおかしくない。

『ちよっと、時間がかかりすぎてゐるのよね〜』

考えられる要素はいくつかある。

ヤクザに顔が利くように、佐田家に与^{くみ}する者が他にいる可能性だ。

しかしそんな仲間がいるなら、タヌキはあそこまで悲觀的ではないはずだ。彼はこの前橋で孤立しているように見えた。

ヤクザに関して言えば、おそらくそのヤクザについている守護に狸は仕えているか、何らかのスジを通してゐるはずだ。そして恐らくヤクザは上野国外がシマなのだろう。

『魂の上納が必要だったのかもしれないわね』

タヌキにとってのシノギが、人間の魂ということなのだろう。

では、呪いを遅らせてゐる要因はなんだろうか？

タヌキも知らない力が作用しているという事になるが……果たして……？

* * *

旅館に着いたときの彩の出で立ちちはひどいものだった。まず両腕にはお土産袋を幾つも下げ、頭には何故か高崎名物ダルマの面を載せ、右手には焼き饅頭、左手にはネギ味噌煎餅があった。端から見れば、デイズニー帰りのOL……の群馬版とも言おうか。おまえとんだだけ群馬を満喫して来たんだと言わんばかりの格好だ。

そんな浮かれポンチな若い女がへらへらしながら歴史ある旅館に入ってきたものだから、女将もあつけにとられるというものだ。

ここは江戸自体は本陣を営んでいた旅館で、本陣というのは参勤交代の時に大名や武士たちが利用した上流階級のための宿である。一方、庶民が泊まる宿は旅籠と言われたらしい。

いわゆるロビーである帳場は掃除がとも行き届いており、床や柱は磨かれて古いながらも黒いツヤを照り返していた。

コロナ禍にあってもお客様をお迎えするという心意気を感じる良い宿だと彩は思った。

「一人なんだけど、今夜泊まれるかしら？」

彩は食い終わった焼き饅頭の串をテキトーな袋に突っ込みながら女将に話しかけた。

「ようこそいらつしやいました、お一人さまでございますね」

女将が呆気を取られていたのは一瞬で、すぐさまおもてなしの笑顔で彩を迎え入れると、宿帳を取り出して、手続きを始めた。

「立派な建物ね」

「ええ、築一四〇年になります」

その声は誇らしげであつた。

「大事にしてるのね」

「代々伝わる大切な建物ですから、心を込めて手入れしております」

と得意そうに語る女将の肩の上に、この本陣の守護である妖怪が照れたような表情でかこまっていた。

「ところで夕食で相談があるんだけど……」

「はい、なんなりと」

「夜はパーッと宴会をしたいのよ」

という言葉聞いて、すこし女将が顔を曇らせる。

まあこのご時世、人が集まる宴会を催すなど良い顔をしないだろう。

「あー、心配は無用よ、宴会をするって言っても私一人だから。なんか派手に盛り上がりたい気分なのよね」

という言葉に、ますます女将は首を傾げた。

「人数に換算して……そうね、二〇人前は用意して欲しいわ」

しかし彩は構わずに考えるフリをして、自分の周囲に集まっている魑魅魍魎どもの数を数えた。
「しよ、少々お待ちください」

突然の申し出に、女将は一旦帳場の奥へと慌^{あわ}てるように引っ込んでいった。

「フフ…」

彩はその後ろ姿を目で追いながら、チラリと帳場に残ったこの宿の妖怪を見やる。

本来なら断られてもおかしくない要望だが……宿の妖怪は心配するなとばかりの得意顔だ。どうやら既に策は練^ねっているようだ。

「二〇人前……でございますか？」

女将が奥から顔だけを出して、念を押すように再度たずねた。

「そうよ、二〇人分は食べるわ。あ、お酒もね！」

酒は重要である。

「も、もう少しお待ちください」

女将がまた奥へと引っ込む。

一人で二〇人前も食うつもりなのかとか、残されたら廃棄にしくちやいけないのかとか疑問はいくつも湧くのだが、それよりも問題なのが食材とスタッフであった。コロナ禍で平日の客が減っている今、二〇人分の宴会の席を用意するほど食材もスタッフも揃^{そろ}っていないのだ。

いっそ断ってもかまわない要望なのは間違いない。しかし旅館としてもせっかくの客を逃したくないという心理もある。さらにはお客様の要望を断っては老舗旅館の名が廃る……という思いもあるのかもしれない。

ほどなくすると、なんだか奥の方が騒がしくなってきた。

人がバタバタと往来する音、さらに驚いたような声や誰かを呼ぶような声が続く。

「始まったわね」

彩はくすくす笑うと、まだ左手に残っていたネギ味噌煎餅をかじった。

帳場の奥では大混乱が続いていた。米屋に酒屋などの食品卸が^{おろし}一気にこの旅館に押し寄せていたのだ。さらに暇を出していた板長や給仕スタッフもどういいうわけか出勤してくる。

おそらく女将も何が何だか解らない状態であろう。

彩はしばらく時間がかかりそうだと悟り、せっかく両手が空いたのだからと、ロビーに用意されているソファに座って、るるぶ群馬県版を取り出した。おそらく先ほどのアーケードで見つけたのだろう。そして両手に余るほどのお土産類は、この本に紹介されていたものと推察される。彩がるるぶの^{しま}四万温泉特集を読み終わった頃、ようやく奥が静かになったかと思うと女将が出てきた。狐につままれたような表情^{かお}をしている。これが彩に^{だま}騙されたなら狐につままれたは間違^{しわざ}いではないのだが、今回はこの旅館に取り憑く妖怪の仕業だ。

「ふふ、どうやら準備は万端のようね」

彩はるるぶをたたむと、ゆっくりと立ち上がった。

「あ、はい……その……奇跡的に……」

あつけにとられていた女将は、今の心境をそのまま吐露した。

「きつとここの守り神が、あたしが来ることを見越していたのかもしれないわね」

彩は目を細めてそう言うのと、女将はハツとした表情をした。

なにか心当たりがあるようだ。

「あ、そうそう、無理を聞いてもらったんだ、先にお金は払っておくわ」

彩はそういうと、先ほど佐田家でもらった札束をボンと番台の上に置いた。

「あ、え……ええ!？」

「もし足りなかったら、チェックアウトするときに払うわ」

「ま、まだ精算もしておりませんし、先にいただくわけには……」

「いいから受け取んなさいな、これっばっちの金じゃ焼け石に水なのはあたしも解っているさ」

「それは……」

「不幸は不意に襲ってくる。けど、幸運も、不意にやって来るものよ」

彩は笑うと、ソファに残していたお土産袋を取り上げ、それを女将の前に差し出した。

「さて、部屋に案内してもらえるかしら？」

「も、申し訳ありません、すぐにご案内します」

女将も押し切られて荷物を受け取ると、彩を部屋へと案内した。

* * *

「えー、それでは九尾の姐さんがこの街に來られましたことを記念しまして……」

「かんぱーい!!!」

「『かんぱーい……』」

彩の前に調子の良さそうなカエルの妖怪が進み出て乾杯の音頭を取ると、妖怪どもが杯を掲げて乾杯の大合唱を始めた。

妖怪の宴会など中小企業のイカレタ飲み会よりもひどいものである。そもそもモラルというものが人間よりもほどほど欠落している。上下関係が露わになり、弱い者いじめがあり、酒の強要が横行する。

一見、渾沌こんとんそうに見えるこの宴も、妖怪同士の力関係や上下関係を見て取ることができた。

そんな彼らも彩に直接話しかける勇氣はなく……ただ、酒を貪むさぼる時間がしばし続いた。

所詮は群馬の田舎の妖怪ども。中央（京都）にいた妖怪のもてなし方も知らなければ、接し方も解らないのである。ただ恭しく彩に酒を注ぐくらいが関の山だった。

だがついに一匹の妖怪が彩の前に進み出て、深々と手を突いて頭を下げると、この前橋に干渉しないようにと懇願してきた。

「佐田だけは減ばさねばなんのです。姐さんには悪いが我らの一〇〇年以上の想いがこの呪いには込められてるいるんです」

「そうだ…！」

「そうだそうだ！」

他の妖怪たちも声を上げる。

彩はその妖怪に視線も合わせずに一合いちごう枰ますを開けると、ほくそ笑んで、目の前で頭を下げたままの妖怪を見つめた。

「別に佐田のタヌキの肩を持つために来たわけじゃないわ……ただ……忘れてたのよ」

「忘れて？」

その妖怪が、顔を上げる。

「あたし以外にも、妖怪がいるってことをね」

そこで彩は初めてその目の前の妖怪に視線を合わせた。

「あたしが封印されている間、この世界はすっかり人間の世になっちゃった」

「はあ」

目の前の妖怪は彩が何を言いたいのかわからずに、生返事を返す。

「けれど少し考えを改めたわ。人間の心に闇がある限り、あたしたち妖怪の居場所がなくなることはないってね」

妬ねたみや嫉そねみ、憎しみ、差別、優越感、不安、傲慢……などなど、人間の心に渦巻く感情は妖怪が付け入る格好の隙すきだった。佐田のタヌキが佐田家の闇に入り込んだように、人間を通して妖怪

は自由にそして大胆に行動できるのだ。

人の心に闇がある限り、妖怪の居場所がなくなる心配はない。人間がはびこればはびこるほど、妖怪の居場所もまた増えていくのだ。そして人々の間に猜疑心さいぎしんを生み、諍いいさかを生み、それは人間同士の争いへと発展していく。争いは争いを呼び、人間の心はますます汚れけが、ずさんでいく。

さらに妖怪たちの居場所を奪った科学の発達によって、人間は妖怪の存在を信じなくなった。いなくなった者に、疑惑の目を向ける者はいない。

災いを、人間は誰も妖怪の所為せいだとは思わないだろう。

「あんたらも、佐田のタヌキも、どっちも天晴れをあげたいわね」

悪の限りを尽くした佐田のタヌキも、それは佐田家の強欲な野心あってこそ成立したものだ。そして佐田家を呪う妖怪たちもまた、佐田家への復讐という憎しみの上に成立している。

これはまさに人間どもの負の感情に妖怪の力が働いて現れている証拠だった。

「だからどっちの味方もしないわ。好きにしなさいな、この街は別にあたしが支配しているわけでもないしね。ただ、妖怪が生ける街。それだけであたしは満足だわ」

そう言って彩は一合枰の中身を一気に飲み干すと、幸せそうに笑った。

「姐さんが束ねたりはしないんですかい？ ついてくる妖怪はたくさんいる」

「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃないの、でもあたしが頭を張ることを良しとしない連中もいるでしょ？」

「姐さんを邪険にするヤツなんて……」

「あたしゃこの国の妖怪じゃないからねえ。あたしが頭になってほしくない妖怪も多いのよ？」
歴史に名を残した妖怪は、彩だけではない。そして彼らが皆、討ち取られたわけでもない。虎こ視したん眈々と、また活躍の場を狙っている。それに日本生まれではない彩に、この国の代表的な妖怪になってほしくないと思っっている妖怪もいることを彩は知っていた。

「今は一人が性に合ってるわ」

そういつて、いつの間にか注がれた一升枡の酒を、ぐいーつと飲み干す。

「んなことよりもあんたらに聞きたい事があるのよ」

彩が空になった一合枡を差し出すと、一升瓶を抱えていた妖怪が待ってましたとばかりに酒を注いだ。

「なんで佐田家を滅ぼすのに二〇〇年以上もかかってんの？」

「……」

彩のその質問に、妖怪たちはお互い顔を見合わせた。

「たかが田舎から出てきたタヌキに、ここまで時間がかかるとは思えないのよねえ」

佐田のタヌキよりも頭のいい妖怪が、この前橋にはたくさんいたはずだ。

今、目の前にいる妖怪たちの顔ぶれをみても、佐田のタヌキをあしらえそうなヤツが何匹か見受けられる。

するとずっと静かに酒を舐めていた蛇の妖怪が、ゆつくりと身体を持ち上げ、彩に向き直った。

「この前橋という街はな、一度だけ、佐田家に救われたことがあるんさ」

「救われた？」

「あれはもう九〇年くらい前のことになる」

妖怪たちがこぞつてうなづく。

聞くとところによると、今から九〇年前の世界大恐慌の時、この前橋もご多分に漏れず深刻な経済危機に見舞われた。倒産が相次ぎ、商い^{あきな}を営む者が没落するだけでなく、自殺までする者も多数現れた。同時に多くの妖怪も居場所を失ったという。

その前橋を救ったのが当時の佐田家当主、佐田強右衛門^{すねえもん}という男だった。彼は佐田家の財産を投じて無利子で金を貸したり、路頭に迷った者たちを雇い入れたり食わせたりした上に、商いに行き詰まったところは買い取って商いを続けられるようにしたという。

「へえ、そんなことがあったのね。」

「だから我らは一〇〇年は佐田家をそのままにしようと誓ったんさ。もしかしたら一〇〇年の間に、また強右衛門のような男が現れてくれるかも知れないと言う希望もあったんさ」

「あと九年で、一〇〇年になります」

他の妖怪が期限を補足した。

「なーるほど、妖怪のくせに義理堅いわね」

「佐田家も強右衛門の意思を継いでくれていりゃあ、呪いなんてかける必要はなかったんさ」

「所詮は田舎のタヌキだった、と」

「違う」

それから佐田のタヌキの悪口大会が始まってしまった。

一〇〇年間たまりにたまった鬱憤^{うつげん}が一気に吹き出した感じだ。

もし強右衛門の時にタヌキが少しでも譲歩していれば、もしくは強右衛門を見習っていたら……いや、タヌキには、強右衛門が佐田の富を食い潰^{つぶ}すくらいでもないヤツに映ったかもしれない。あの短絡思考のことだ、強右衛門が去ったあとは、より強欲に悪事を働いた可能性もある。

だが……今のタヌキは……。

「フフ、もしかしたら九年待たなくても良くなるかもしれないわよ」

彩は佐田のタヌキのやられっぷりを見て、なんとなくそう思った。

「『どうということですか？』」

妖怪たちの会話がピタリと止み、いつせいに彩の方を振り向く。

「それは、お社の落成式までのお楽しみね」

彩はくいーっと一合枰を飲み干すと、ニツコリと笑った。

* * *

翌日、宿を出るときには女将だけでなく、ご主人も彩を見送りに出てきた。

そして丁寧な挨拶とともにお土産の包みと、そして釣り銭の入った封筒を彩に手渡した。

「釣りはいらないうわ。無理なお願いを聞いてくれて嬉しかったし、料理も美味しかったし、とても満足よ。金使いたいヤツには、使わせておけばいいのよ」

彩は笑いながら釣り銭の入った封筒を旦那の着物の共襟の中にグイグイと押し込んだ。

「帳簿はテキトーにサービス料を上乗せして処理しときなさいな」
そう言って、ポンとその封筒を押し込んだ辺りを叩く。

「誠にありがとうございます」

ご主人が深々と頭を下げた。

「そういえば、ご主人」

「は、はい」

「こちらにはお祀りしている神はおられるのかしら？」

「あ、はい、私どもには代々お祭りしている神様がおりまして……」

と、ロビーの上に掲げられている神棚を案内した。

「スズメ様になりまして、福来雀とも呼ばれております。いわれはいろいろ伝わっているのですが、大名行列で宿の手配ができなかったお侍さん達を、私どもの宿に案内した雀と伝わっており

まして……」

「あら、かわいいわね」

見上げた神棚にはスズメが……と思ったら、当のスズメは彩の足元にちよこんと畏^{かしこ}まっていた。彩よりも頭上にいることが失礼にあたると思ったようだ。佐田のタヌキとは大きな違いだ。

「実は笑われてしまうかもしれませんが、昨日は大口のお客様が来られるかもしれないと予感しまして……福来雀様のお告げかもしれません」

「フフ、その心は大切になさい。そしてお告げを感じたらその通りにするといいわ。きっと、名前の通りあなたたちに福をもたらしてくれるだろうから」

「はい」

主人は笑われると思っていたのだが、逆に肯定されたので少し驚きながらも嬉しそうに深くうなづいた。

「神は信じるその心の中に宿るもの。その信じる力が神の力になる。きっとあなたたちを助け、導いてくれるわ」

彩が宿を出ると、この宿に取り憑いているスズメが彩の周りを飛び回り、何度も礼を告げた。「いいのよ、それよりもっと自分に誇りを持ちなさい。お前はこの本陣を守り、そしてそれを受け継ぐ人間たちを守りつづけた。その真摯な心があつたからあたしはこの宿を選んだのよ」この旅館は魑魅魍魎たちからは一目置かれることになるだろう。

四、狸の幕引き

彩が再び佐田家を訪れたのは、社の落成式だった。

春の陽気を感じる四月の初め。佐田家の日本庭園の池の畔に、小さいけれども立派な社が完成していた。社は総檜造りで、所々に金箔、狸の彫り物があしらえてあった。大ききこそ小さいものの、日之出神社の拝殿よりも遥かに豪華だ。

まだ真新しい檜の表面は、年輪がハッキリと見て取れる。

そのピカピカの社を囲むように紅白幕が張られ、緋毛氈という赤い敷物が敷かれて、お社の前にはお供え物などが並べられていた。その後ろに関係者がずらりとかしこまって並んでいる。

最前列は落成式を取り仕切る宮司と佐田家の大旦那。その少し後ろにその妻とおそらく佐田家の親戚筋、他賓客や従業員が続く。彩はメインの宮司ではないため、その賓客の場所にいた。

『狐様が祝詞をあげてくださるなんて、お、おらあもう……』

佐田のタヌキは式そっちのけて、来賓席の彩の前で涙を流して喜んだ。

『アホ、あんたのために祝詞をあげるわけじゃないわよ』

『わかってまさあ。でもこのまま呪われて終わると思ってたから、狐様に目をかけていただいた

だけでも嬉しいんでさあ』

佐田のタヌキはうれし泣きで顔がクシャクシャだ。

そこまで嬉しいものかね、と彩は呆れたが、自分の価値と言うものは妖怪の世界ではまだまだ失われてはいないようだった。

『喜ぶのはいいけど、あたしの祝詞が終わったら、いよいよ佐田家は終わりよ？ 呪いが……成就するわ』

『覚悟は決まってまさあ。佐田家はもう呪いから逃れられないって聞いて、あつしは全て悟りましたわ。最期に狐様に祈ってもらえるだけで、あつしには充分でさあ』

妖怪であるタヌキがその悪事を悔いることはない。ただ、この前橋という街での勢力争いに敗北したのだ。妖怪として、そして佐田家の守護者として頑張ってきた結果は、佐田家の滅亡となった。その結果は空しいものではあるが、彩という歴史に名を残している大妖怪によって引導を渡されることに、タヌキは報われた思いを抱いているのである。

しかも、佐田家には立派なお社まで建ててもらったのだ。

『フフ、逃げ帰るか、悪あがきでもするのかと思つたのに……意外に根性あるのね』

『ここを離れることだけは、したくねえんでさあ』

タヌキは表情を引き締めると、唸るような声で答えた。あのみすばらしいタヌキとは打って変わった真剣な表情。この前橋に何か特別な思い入れでもあるのだろうか？

不憫^{ふびん}なのは佐田家であろう。こうして大金を投じて造った社も、今や意味のないものに……。

とはいえ、タヌキの悪事は、佐田の強欲さが呼んだものである。

彩はそんな佐田家の一族に視線を移した。

大旦那の少し斜め後ろには妻がいるわけだが、家族はそれだけのようだ。佐田家の一大イベントにも関わらず、難のある長女はともかく、長男である若旦那の姿もなかった。

どうやら彼は部屋にお引きこもりのようだ。

『フン、外道が』

彩は心の中でそうつぶやくと、さらに屋敷の方へ視線を移し、目を細めた。

こんなめでたい日に、彼は相変わらず姉を陵辱していたのである。

とはいえ外道などという言葉は、妖怪にとっては褒^ほめ言葉である。のだが、この外道な行為を憎む自分^{自分}がいることに、彩は少し違和感を覚えた。

外道な人間こそ、妖怪の好物ではないか。

『若旦那は、いいご身分ね』

という彩に、タヌキは『それも今日までさあ』とだけ返した。

* * *

落成式は一時間ほどでつつがなく終了した。

その後は、美しい庭園に面した大きな広間で、宴会の席がもたれた。

春の陽光がとても心地よい。

おそらく大旦那は桜の開花に合わせて落成式をしたかったようだが……桜はすでに散り始めており、花びらは半分ほどしか残っていなかった。それでも春風が桜の花びらを宙に舞わせ、池の水面には花びらが漂い、宴会の雰囲気^{ただよ}を盛り上げた。

彩はそんな景色を眺めながら、おちよこでちびりと酒を飲む。後ろでは宴会の賑やかな音が響いていたが、今の彩にとっては心地よい子守唄のようなものだ。

「彩殿、彩殿！」

不意に喧噪の中から自分の名前を呼ぶ声が混じった。

彩は心の中では面倒だと思いつつも、ニツコリと笑って振り返る。

「こちらが噂の彩殿ですよ」

立ち上がると大旦那が一人の男を従えて、彩の側までやってきた。

「初めまして……」

噂？と、少し怪訝な表情^{かお}になりながらも、彩は軽く会釈した。

「彩殿、こちらは取引先の引田建設の社長で、我が社のお得意様でしてな。もう二〇年以上の付き合いになりますわい」

すると大旦那の隣にいた男が名刺を差し出してきた。いかにも田舎の土建屋といった感じの風体だ。背は高くないが体はガツシリしていて、肌は少し浅黒い。そして笑顔がなんとなく下品。

「おっと、こちらが新井商事の専務で、まあ仲買人仲間といったところですか」

と、次から次へと彩の周りには来賓が集まってきた。

「は、はあ……」

いったい何事かと彩は思ったが、どうやら彩がこの佐田の屋敷に着いてから、あの美しい宮司は誰だとずっと噂になっていたのだという。そして酒の席に託けて彩を紹介してもらおうと、来賓の男どもが群がってきたのだ。

しかも彼らの視線が彩の胸元に集中している。とはいえそれは無理のない話で、巫女装束の掛け衿から弾け出そうな大きな乳房に視線を向けるなど言う方が酷と言うものだ。歴史を振り返れば、そもそもこの狐の妖怪は、美貌で国を操ってきたのだから。

当の彩は、人間の雄が自分の身体に欲情するということなどすっかり忘れていた。そういえば封印される前は、何人もの男を食っていたではないか。性的にも、物理的にも。

彩は事情が飲み込めると大旦那の横で一緒になって挨拶をして回ったが、これは本来妻のすることなのではないかと思うものの、離婚調停中であることを思い出した。

大旦那は彩を紹介するたびに、この彩を招待し、祝詞を読ませたのは自分だと自慢げに話すほどだった。大旦那はよほど彩のことが気に入ったのだろう。

『狐様、狐様……！狐様が人間に頭を下げるなんて、やっちゃいけないえ！』

それに気付いたタヌキが慌てて彩の足許に駆け寄ったが、彩は薄く笑うと、『まあちよつと見てなさい』と言って、大旦那のあとに着いていった。

『それから、顧問弁護士の服部君だ』

引き締まった口元と聡明な目つきに、まるで判を押したような頭いいです的なメガネ。年は三〇代後半だろうか。嫌味のない笑顔を浮かべて、彼は名刺を丁寧に両手で差し出してきた。

『はじめまして、服部です』

屈託のない爽やかな笑みを彩に向ける。

『どうも、はじめまして』

彩はそれを同じく両手で受け取ると、丁寧に頭を下げた。

『生憎、名刺を作っておりませんので、挨拶だけで失礼いたします』

『いえいえ、この度は社長の急な申し出を受けていただき、感謝いたします』

と会話をしながらも、彩はこの服部という男の心の内を探った。

なるほど、この弁護士は大旦那の妻と不倫関係にあった。

大旦那も大旦那だが、妻の方もなかなかの食わせ物のようだ。しかも弁護士を味方に付けているわけだから、離婚調停は確実に妻の方に有利に動くだろう。

そして、この弁護士の守護者と言うと……。

『ふーん、そういうこと……』

彩は弁護士への守護者が、佐田家に呪いをかけている方の妖怪であることに気付いて感心した。佐田家を滅ぼした後、その富をどうやってせしめるのか疑問だったが、どうやらそれらの準備も着々と進められているようだった。

事が終われば、大旦那の妻は、この弁護士からかなり悲惨な捨てられ方をするだろう。それから視線に従業員に移してみると、なるほど、従業員の中にも入り込まれている。すでに佐田家は王手を指された状態であった。

呪いはすでに完成していて、あとは一〇〇年経つのを待つばかりという状況のようだ。

『妻には見限られ、息子は役に立たず、会社は乗っ取られる寸前……大旦那も憐れよねえ』
彩は内心、クスクスと笑った。

『ま、こういう状況なワケ、わかった？』

彩は足許にいたタヌキを軽く足で小突くと、ニヤニヤと笑った。

『あつしは全然気付かなかったでさあ……』

『他人を蹴落とすことバツカリ考えて自分の力を磨かなかったのが、気づけなかった原因よ』

奸智には長けても、感知には長けていなかった。騙すことにはかり集中して、自分が裏をかかれてることにまったく気を配れなかったのが、敗因の一つであった。

『情けねえ……自分が情けねえですわ』

タヌキは畳の上にへたり込むと、ガックリと肩を落とした。

* * *

大広間で宴会が催もよおされている中、奥座敷の若旦那の部屋では姉の凌辱がまだ続いていた。

部屋は薄暗く、若旦那の体臭が染みついた嫌な臭いが鼻につく。

遠くで宴会の音が漏れ聞こえてくるのをまるで打ち消すかのように、若旦那は姉の身体を貪ることに耽ふけっていた。

そもそも他人と会うことさえもストレスとなってしまうようなこの男が、宴の席に参加することなどあるはずもなく、逆に家人が宴会の席で忙殺されている今この時こそ、安心して姉を凌辱できるというものだ。

一方の姉は弟に身体を求められることの異常性には気づいているものの、それにどう対応してよいのかすら解らない状態だった。拒む方法さえ解らないのである。また身体は正直なもので、肉体的快感から抗あらがうこともできず、彼女の頭の中は、罪悪感と快感に支配されてしまっていた。どうすればいいか解らないから、弟の言うがままにまかせるしかない。

しかしこのままでは決して思っていない。

しかし、弟にされるセックスは気持ちがいい。

セックスしてもらえない日は、一日中自慰行為じいをしてしまうほど、セックスは気持ちがいいけど、たぶんこれはしてはダメ。特に血のつながった弟とは、してはいけない。

嫌なのに、弟が目の前に現れると、自然と身体が反応してしまう。

そんな自分自身も大嫌い。

だから彼女は押し寄せる快感に溺れながらも、必死に目を閉じて、そして両腕で顔を隠して、弟に犯されていた。

「もっと声出せよ」

それを知ってか知らずか、弟である若旦那は、意地悪く姉の腕を払って顔をのぞき込む。

姉はイヤイヤとばかりにまた腕で顔を隠そうとした。

「フン……」

すると若旦那は、膣の前側を擦り上げるように激しく突いた。

「んくっ!! んひいっ……はっ……んんっ!!」

「ほら、ここがいいんだろ?」

姉の弱点など知り尽くしている。若旦那は容赦なく姉のウィークポイントを責めまくった。

「っあ! はあっ……あっああっ……ああっああっんああっ!!」

声を止めることが出来ない。快感に合わせて、勝手に淫靡いんぴな声を上げてしまう。

「ド淫乱だな、すげー締め付けてくる」

同時に膣がぎゅっぎゅっと陰茎を締め上げる。まるで射精を欲しているかのようだ。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

もう何度エクスタシーを迎えただろう。姉は声を震わせながら終わることのない快感に耐えた。

「そんなにくわえ込むんじや、膣内^{なか}に出すしかないな……」

弟が耳元でささやく。

「!!」

と同時に、膣がきゅっと締まる。

ダメ、そんな反応したくない……と、心の中では叫ぶ。

「うお……」

だが弟にとってはその締め付けがOKの合図としか思えなかった。

「イヤ……だ……イヤ……」

それでも姉は、また両腕で顔を隠しながら首を左右に振った。

それが精一杯の彼女なりの抵抗だった。

「ダメだね。四人目を孕ませてやる。そして堕ろさせるからな？ そしたらお前は四人も殺した殺人者だからな？ お前は人殺しなんだ。そんな人殺しをオレが愛してやってるんだからな。オレがいなきやお前は警察に捕まるんだからな？ いいのか？」

どうやらこれが姉を呪縛する常套句^{じょうどうく}のようだ。姉はすっかりこの言葉を信じ込まされており、

警察に捕まるという言葉聞いて、フルフルと首を左右に振って、弟である若旦那にすがり着くように抱きついた。

「よしよし、じゃあ中出しに決まりだ」

若旦那にとってもこれが合意の証のようなものだろう。

さっきよりも激しく腰を突き動かし、抽送を繰り返す。そのたびに刺激の波が姉の頭に押し寄せ、姉は言葉にもならない声を上げ、全ての思考を放棄して、弟に身体を委ねた。

「ひうっ！……あっっ！！あ———!!!」

先に絶頂に達したのは、姉の方だった。

快感の大波に襲われて弟にしがみつくと、ぶるると身体を震わせた。同時に膣が何度も痙攣して、陰茎を締め上げる。

「おおっ……おお!!」

同時に男の方も一気に射精した。膣に応えるかのように陰茎もブルルと震えたあと、大量の精液を勢いよく子宮に向かって吐き出した。

「あー、やべえ……あー、やべえ……マジでこのマンコ、やべえわ」

若旦那は射精しながら何度も陰茎を奥に打ち付けて、精子をより深いところへと流し込んだ。
「着床完了っ」と

若旦那はしこたま姉の膣内に射精すると、ずるんと陰茎を引きずり出した。

クツパリと膣口が開いたままだが、そこから精液があふれることはなかった。しっかり奥まで注入されてしまったようだ。

「んあむ……！」

陰茎が引き抜かれると、姉はすぐに若旦那のそれにむしゃぶりついて、尿道に残った精液がなにか確かめ、自分の愛液を一生懸命舐めとった。終わったらそのようにしろと舐けられているのである。

丁寧に舐め終わると、姉はようやく脱力して、布団の上に倒れ込んだ。一回のセックスで一〇回以上イカされるので、ヘトヘトになるのだ。

それでもこのヘタっているときに、また挿入されることもある。

「へへ……」

若旦那は再度姉に跨がると、衰えない陰茎をふたたび膣口にあてがった。

それだけで身体が反応して愛液があふれ出してしまうのだから、自分の身体が憎たらしい。

全てを諦めて、姉は弟を再び受け入れた。

身体は疲れているというのに、しっかりと反応して快感という情報をよこしてくる。

姉は犯されるままにただ漠然と天井を見つめていたのだが、薄暗い天井に何か黒いシミがあることに気付いた。それは徐々に大きくなって、まるで這い出すように盛り上がってきた。

しかもその黒い塊の中からギョロリと目が二つ現れたかと思うと、姉を睨みつけた。

恐怖心が一気に快感を駆逐する。

その化け者はそのまま天井から垂れ下がって来たかと思うと、ズルンと姉の顔の上めがけて落ちてきた。

* * *

彩がようやく大旦那から解放されて、花びら舞う庭園を見ながら酒を飲み直そうとしていた頃、屋敷の奥の方からシーツを掴んだままの裸の女が庭を横切っていくのが見えた。

「は？」

彩は一瞬、鳩が豆鉄砲を食ったよう顔をしたが、女の後ろを佐田のタヌキが追いかけているのを見て、何が起きたのかを察した。

女は恐怖のあまり闇雲に走り、ついに池まで追い詰められてしまった。

『フン、タヌキめ、自分から引導をもらいに行ったか』

彩がクイツとおちよこの酒を飲み干した瞬間、進退窮^{きわ}まった女は池に飛び込んでしまった。もつとも飛び込んだのか、それともタヌキに詰め寄られてそのまま落ちてしまったのかは分からないが……。

「大変よ！ お嬢様が池に落ちたわ！」

彩がそう叫ぶと、他にも見ていた客はいたらしく、大騒ぎとなった。

すぐに黒服の男達が飛び込んだ女を救い出そうと、池の中に入って行く。

池の深さはそんなに深くはない。膝上くらいまでだ。誰しもがすぐに助け出されると思ったことだろう。だが、落ちた女はもぐくこともせず、声を上げることもなかった。池の底の泥が舞い上がり、すでに女の姿は見えなくなっていた。

「泥しかないぞ!？」

「もっとこっちの方じゃないか？」

黒服の男達も、濁った場所を中心に探すのだが、見付けられない。

その間にも心配する客たちが、池の周りにどんどんと集まってきた。

「あ、今、足に何か当たったぞ！」

黒服の男達が徐々に池の中心へと移動する。

「そんなに奥じゃないだろう、もっと岸の方ではないか？」

大旦那が何かを心配するような、うわずった声を出した。

「うおおお？」

すると岸から一番遠かった一人が一気に腰ぐらいまで落ち込んだ。どうやら途中で深くなっているようだった。若旦那の表情が凍り付くのを、彩は見逃さなかった。

「見付けたぞ！」

深みにはまった男が手応えを感じたらしく、他の男達を呼んだ。

「ダメだ、何かが引つかかっている！」

「引つかかるものなんてあるのか？」

「びくともしねえ！」

「そんな馬鹿な」

「じゃあそっち持ってくれ、俺が抱きかかえる」

男は上半身を池の中に埋めるように屈かがむと、水中にある何かを抱えて一気に引き上げた。

おおっという歓声が周囲から上がる。

彩は人だかりから少し離れたところで、その一部始終を見つめていると、佐田のタヌキがいつの間にか彩の足許に戻ってきていた。

『姉の魂は狐様にまかせませう。佐田家が滅んだら、あの子は一人では生きていけねえですから。せめて魂だけでも幸せにして欲しいんでさあ』

そう言つて水面を漂う、一筋の魂を指さした。

どうやら、池に飛び込んだ女はすでに息を引き取ったらしい。

『あたしに頼み事をするとは、それなりの覚悟はできてるようね』

彩は池の畔に近づき、漂っている魂を呼び寄せた。

『あとは若旦那を始末して来ませう』

彩が魂をすくい取るのを確認してから、タヌキはもう一度奥座敷へ向かおうとしたが、彩はタヌキの尻尾を踏みつけると、首を横に振った。

『いいのよ、若旦那はあのままで』

『へ？』

『佐田家は終わるんでしょ？じゃあ誰もあの男をかばう者はいないわ。あの男にはこの世の地獄も味合わせてやりましょう。どうせ自殺する勇氣もないわ、あんなクズ人間』

『狐様……』

『この世で地獄を味わって、死んだら、彼の世で永遠の苦しみを味わえばいいんだわ』

彩はそう言うと、自分の掌で泳ぐ魂を見つめた。

『それに引き替え、この魂の無垢なこと』

食べてしまいたいくらい。

という本心を胸にしまい、彩は姉の魂に加護を授けると手を広げて、魂を放した。

『あなたは自由よ、永遠に……』

魂に重さがあるのか……そんなことを考えたこともなかったが、解き放たれた魂はまるで風に舞う花びらのように、空へと舞い上がって行った。

と、同時に、姉の身体がようやく池から引き上げられた。

どよめき上がり、さらに叫び声や怒号が飛び交った。

なぜなら、池から引き上げられたのは、一人ではなかったからだ。

『き、狐様……』

タヌキがハツとして彩を見上げた。

『せっかくだから、あそこに埋まってもう一人も、一緒にしてあげたわ』

引き上げられた姉の身体には、もう一人の腐乱死体が絡みついていたのだ。

よく見ると、二人はまるで始めからそこにいたかのように、抱き合っていた。

* * *

「さて、と」

彩はまだ混乱している庭の様子に視線を向けた。

大旦那が呆然と立ち尽くしているのが見える。

しかしこの一大事だというのに、例の運転士の姿がない。立場的に大旦那のそばにいないければならないはずなのだが。

「ふむ……」

彩は騒ぎを背に、心当たりのある場所へ足を向けた。

表玄関を抜けて前庭に出ると、あの高級車が収められているガレージがある。

案の定、ガレージのシャッターは上がっており、中に誰かいるのが見えた。

この騒ぎの中、運転士が車を磨^{みが}いていたのだ。

「随分な落ち着きようね。大旦那をサポートしなくてよかったの？」

彩は黙々と車を磨く運転士に、声をかけた。

運転士は振り返ると、深く彩にお辞儀をしたあと、首を左右に振った。

「もう佐田家は終わりですからもう。私にできることなど、もうありませんわい」

「あんた、佐田、強右衛門だね？」

「……」

「大恐慌から前橋を救った、佐田家の当主」

「……遠い昔のことですじゃ」

「この街の妖怪たちから聞いたわ。あんたがこの街を救ってから、一〇〇年は呪いを成就させないってね」

「左様^{さよう}でしたか……しかし佐田家がしてきた罪はあまりにも多いですから。一〇〇年経とうとも、犯してきた罪が消えるわけでも、赦されるわけでもない」

「けれど償^{つぐな}う時間は充分にあったわ」

「しかし、一〇〇年あれば、佐田家が変わってくれるかもしれないとわずかな希望はありましたわい。じゃが、見ての通りじゃ」

「あのタヌキじゃねえ……」

「佐田家が栄えるきっかけとなった浅間山の噴火での活躍はのう、美化されたものなんじゃ。実際はどさくさに紛れて略奪や殺人もしたし、藩の物資を横領したりもしたそうじゃ」

佐田家が奪った命の数は決して少なく、成功の裏には多くの犠牲があった。

「なるほど」

「佐田家はこれでようやく終わりじゃ。そして、当然の結果じゃ」

老人は静かにそういうと、ゆっくりとうなづいた。

「あたしを佐田家にあわせた目的は？」

「一縷の望みを掛けて、お伺い申した。彩様が来られれば、何かが変わるかもしれないと。無論、変わらずとも仕方がないと覚悟した上での事ですじゃ」

「少なくとも、佐田家の寿命は縮まったようね」

もし彩がこの街に来なければ、あと九年は佐田家は生き延びただろう。

「お陰で、迎えが来たようじゃ。」

「呪いが一〇〇年待つ必要がなくなったからね」

呪いの成就とともに、この老人の役目も終わるのだろう。

もっともこの老人が本当に妖怪なのか、彩にはまいち判別がつかなかった。運転手として転生したとしても、人間に転生できるならそれを手助けした者がいるはずだし、守護霊や妖怪とし

て存在するなら、同じくそのように取り立てた者がいるはずだ。

それをするのはタヌキの役目ではあるが……タヌキは彼の存在を知らないようだし……。

「フフ……不思議なこともあるものね」

もしかしたら佐田家の呪いが彼を留めたのかもしれない。彩はそう思った。呪いの力は一〇〇年の猶予とともに、佐田家がこの強右衛門のように変わることもまた願っていたからだ。しかしそれは叶わず、呪いは成就することになってしまった。

老人の身体に、餓鬼^{がき}どもが群がり、老人の魂をその肉体から引きずり出そうとする。

「フフ、地獄行きは、決まっているのね」

「佐田家の所業を考えますれば、今までこの世に留めていらただけでも御の字というもの」
運転士は自分の身体にまとりつく餓鬼を引き剥がすと、床へと投げつけた。

「それに、あなた様のような大妖怪が引導を渡してくれたとあれば、地獄への土産話もできるといふものですじゃ。鬼たちの驚く顔が目には浮かびますわい」

そう言つて彼は笑うと、彩に背を向けて、地面に胡座^{あぐら}をかけた。

「こやつらにとどめを刺される前に……」

「あんたも、肝っ玉は太そうだねえ」

「ワシも佐田の人間じゃからのう」

そうして老人がゆっくりと目を閉じた瞬間、彩は彼の首を刎^はねた。すると老人の体が塵のよう

に崩れ去り、そこに残った魂を餓鬼どもが奪い合うようにして連れ去っていつてしまった。

「フフ、天晴あっぱれな最期ね。佐田の人間にはもったいないくらい」

彼の魂は強く気高い。

地獄においても、鬼を一泡吹かせることぐらいするかもしれない。

* * *

ガレージの外に出ると、サイレンの音が近づいてきているのがわかった。それも何台も。

流石にここまで事が大きくなったら、佐田家の力では隠し通すことはできないだろう。何せ衆人環視の前で死体が上がったのだ。しかも佐田を呪う者たちもそれを見ている。

佐田家だけでなく、手を貸したヤクザたちにも捜査の手が伸びるだろう。

「終わりましたわ」

大広間に戻ってきた彩を見付けたタヌキが、彩の足許にやってくる。その声は元氣はなかったが、表情はなにか吹っ切れたというか、初めて会ったときより柔らかな印象を受けた。

「佐田家も終わり、あっしも終わりでさあ」

佐田家がなくなれば、魂を得る術すべもない。あとは朽くち果はてるのみである。もし死にたくなければ、新たに誰かに取り憑くのが手っ取り早い、この前橋では敵が多すぎる。

「佐田家が滅びるなら、おまえがこの地にいる意味もない。万沢集落に戻れば、静かに余生を過ごせるわよ？」

「逃げ帰る気は毛頭ねーでさあ、狐様。この街は、あっしの街なんでさあ」

タヌキは誇らしげに、そんなことを言う。

「佐田家は呪われて当然の家ですがね、前橋を発展させた自負はありまさあ。市長だって、佐田家に足を向けて寝られやしません。狐様、この街は、佐田家が支えてきたんでさあ」

古くから佐田家がこの前橋に尽くし、この街が県庁所在地であり続けているのにはそれなりの理由がある。佐田家の富は前橋の富でもあるとタヌキは自負しているようだった。彩が万沢集落に逃げ帰るように勧めても、それを受け入れなかった理由を、彩はようやく理解した。

「そんなことを思っていたのね。」

「あっしは謝りはしません。責任もとったりはしません。佐田家のおかげでいい目を見れたヤツは、あっしを呪った連中にもたくさんいるんでさあ。だからあっしは死んでもこの街から離れやしませんよ」

タヌキはそういうと、あの立派な社に駆け上った。

「あっしが死んでもこの社が佐田家の繁栄を語ってくれるんでさあ！狐様が祝詞をあげてくれたこの社が……」

この街に佐田家の足跡はたくさんある。

そしてそれは佐田のタヌキの足跡でもある。

彼にとって、元の山に戻るよりも、この街で命を落とした方が価値あることなのだ。

群馬の山奥から出てこの街の繁栄を支えた田舎狸の誇りは、この前橋という街そのものだったのである。

* * *

数ヶ月後、前橋駅にほど近い歓楽街のゴミ捨て場に、みずばらしい年老いた狸の遺体があった。カラスとのゴミ争いに負け、食事にありつけず、ついに事切れたようだった。

この狸がかつて前橋一と言われた佐田家を支えた、あの氏神のなれの果てだと知る者は、彩とそして佐田家を呪った妖怪たちだけだろう。

妖怪としての力を失い、年老いた狸となってもなお、彼は前橋から去ることはなかった。

そして彼を呪った者達も、それを由^{よし}とした。

二〇〇年以上すんだこの街で、誰にも看取られることなく、ゴミ捨て場で息絶えたのだ。

がしかし、それでよいのだ。この最期は、彼自身が選んだものだから。

幸いにも妖怪としての力を失った彼を、改めて責める者は誰もいなかった。タヌキを呪った連中はタヌキの潔さを認め、そのまま前橋に居続けることを咎めなかった。そしてそれが狸にとっ

ての最後の誇りと自尊心となった。自分は最後までこの街で生きたのだと。

ふと一羽のスズメが舞い降りると、タヌキの側までちょんちょんと跳ねて近づき、その顔をのぞき込んだ。

その嘴くちばしには、一輪のタンポポが咥くわえられている。

スズメは少し目を細め、何か考えているような、祈っているようなそんな仕草をしたあと、タヌキの周囲を何周か回ると、タンポポの花をそっと手向けて飛び去っていった。

六、狸の夢、神の夢

お社の落成式から一年後――。

佐田家のあつた広い土地は、ちよつとしたショッピング・モールになっていた。

とはいえイオンモールのような巨大な複合施設を作るほどの広さはない。ガラスと木をふんだんに使った瀟洒な二階建ての建物で、あるものを取り囲むようにコの字型に建っている。そのあるものとは、佐田家の手入れの行き届いたあの美しい日本庭園だった。長女が飛び込んだ池も、そのままだ。

佐田のタヌキのために建てられた立派なお社も残っている。

テナントは群馬・前橋の地物を扱う店、オシャレなカフェやスイーツ店、同じく地元の伝統工芸を使ったファッション・雑貨などの店、十数店舗が入っていた。

一方のお社には鳥居が新設されていて、名前も『日之出神社 前橋分社』となっている。

珍しいのがその狛犬だ。狐ではなく、狸であった。阿吽のポーズで、左右に二匹の狸が社の前に鎮座しているのだ。この狛犬が珍しいというので、テレビやネットでもよく紹介されるようになった。

「うん、甘さも控えめで、それでいて見た目は豪華だし、悪くないわね」

彩は池のほとりにある江戸式のベンチに座って、新作のスイーツに舌鼓を打った。

抹茶の上にあんこを挟んだゴーフルが浮かんでいて、その上に生クリームやフルーツなどが乗った豪華なスイーツだ。上を食べている間にゴーフルが抹茶を吸って、やがて沈むと、渋みが強い抹茶にあんこや生クリームが溶け、抹茶ラテのような甘さになるという仕組みのようだ。

「お店も繁盛してるし、参拝客はあとを絶たないし、すぐに元は取れそうね」

彩は満足げな笑みを浮かべると、カップの底に残ったあんこをスプーンですくって舐める。

時刻は夕暮れ時。日本庭園や池がライトアップされ、水面には桜の花びらがただよう。

「まさか日之出神社の分社が、こんな都会にできるなんて……」

隣りにいた紗雪が、シャクシャクとかき氷を食べながらつぶやいた。

紗雪のかき氷もまた豪華だ。天辺に生クリームの層があって、その上にはイチゴがどんといくつも乗っている。そしてイチゴシロップがタップリしみたかき氷部分と、底も練乳かアイスがつまっているようだ。かき氷を受けるガラス製の器も豪華で、ずっしりと重そうだ。

「調度よい大きさの町よね。人口三〇万人、県庁所在地で東京にもそこそこ近い」

彩がスプーンをくわえたまま、目を細めた。

「なににちょうど良い町なの？」

「あたしが支配するには、大きすぎず、小さすぎず、ちょうど良いってこと」

ニヤニヤと笑う。

「え」

「支配」という言葉は聞かなかったことにしよう、と紗雪はなんとなく心に誓った。

佐田家の屋敷とその広大な土地は、彩によって買い取られた。

殺人及び自殺の現場ということ、民事で早く現金が欲しかった佐田家の事情とが相まって、格安で手に入れることが出来たらしい。

それから佐田家を呪っていた連中と手を組んで、この新スポットを立ち上げた。

縁起の悪い土地ではあったが、彩はそれを逆に演出として使った。若旦那にストーキングされて殺された女のために、佐田家の長女が命を捧げたということにしたのだ。その目的は地獄に行かないためだとか、見付けてもらうためだとか、そんなもってもらいたい尾ひれを付けて、噂を世間に流布した。

はかなさと、せつなさと、そして誰かのために命を捧げるという行為。

日本人はそれが大好きだと言うことを、彩はよく知っていたようだ。

そして狛犬が狸というヘンテコな取り合わせも効いたようだ。

いつしかこの場所は、モールが完成する前からパワースポットとして知られるようになった。

「ちょっと、紗雪ー!？」

すると、池の向こうの方から猫又の凜がやってくるのが見えた。

「って、まだ食べ終わってないの？」

「うむ、まだ休憩中」

「もー、はやくしてよ、お客さんいっぱいなんだから……」

「食べ終わったら、行く」

紗雪は相変わらずのマイペースで、シャクシャクとかき氷を掘り進む。

「あ、彩先生、お客さんきてる」

「へ？」

「なんかすごく偉そうな子ども。でもあたしの正体一瞬で見破るし」

と聞いて、すぐに誰かは解った。

「わかったわ、一緒に戻るわ」

彩は片付けを紗雪に頼むと、凧と一緒にテナントエリアに戻った。

* * *

凧と一緒に戻ったお店は『鈴鳴屋^{すずなりや}』だった。前橋店と書いてある。

中は結構な人でこった返っていて、繁盛しているのがよくわかる。

鈴鳴屋は社務所も兼ねていて、お守りや御朱印におみくじ、開運グッズなども置かれていた。

そしてたくさんさんの買い物客の中に、えらい派手な幼稚園児がいた。

しおさき
汐碕市市長、ルイーゼ・アンナ・フォン・ホラントである。

「狐よ、汐碕店にはない商品がたくさんあるではないか。汐碕店では扱わぬのか？」

真横にやってきた彩に視線をやることもなく、ルイーゼはつぶやいた。

キリスト教徒
「あんたが買ってイイのか？」

彩が半分呆れながらカゴの中をのぞき込む。

「フン、たまには子供だましに現を抜かしても良からう」
うつ

そう言ってルイーゼは前橋店限定商品『皿舐め石鹼』さらな せつけんをカゴに入れた。なんでもどんな頑固な

油污れも落ちるといふスゴイ石鹼らしい。ちなみにお風呂用『垢舐め石鹼』あかなも人気で、どちらも

SNSなどでバズった商品らしい。

「売り切れ商品も、かなりあるようじゃが……？」

そして残念そうに売り切れ御免のポップを見つめた。

「欲しかったらいくらでもあんたの屋敷に直接送ってあげるわよ」

彩はめんどくさそうにそのポップを持ち上げて商品名を確かめた。

「そういう特別扱いはいらぬのじゃ」

ルイーゼは買い物カゴを凜に託すと、彩を手招きして外に出た。

それからテキトーに席の空いてるカフェに入る。

カフェ店内もほぼ満席だ。

「なかなかの繁盛ぶりじゃな」

ルイーゼは表を通る客たちをみつめて、安堵あんどしたような笑みを見せた。

「おかげさまで」

彩がニヤける。

「さて、収支を持ってきたぞ。数値はとても良い。メディアにも取り上げられておるし、優良物件間違いなしじゃ」

ルイーゼはA4のペラいちーを彩に渡した。そこにはこのショッピングモール全体のオープンしてから今までの簡単な収支と、次の決算までの予想売上・粗利あらりが書き込まれていた。

「わお、素敵な数字ね」

「コロナ禍で神頼みをしたい連中はたくさんおる。そこに目をつけてみたわけじゃ」

「相変わらずの売上手なこと」

「それが妾の仕事じゃからな。稲荷ではあるが、狛犬こまいぬがタヌキというのが客寄せになっておるようじゃ」

「なるほどね、あの頼りないタヌキも役に立ったってわけね」

「まさに、妖怪しわざの仕業じゃ」

「誰がうまいこと言えと……」

「このまま行けば、元はすぐに取れそうじゃの」

ルイーゼはホツとしたように胸をなで下ろした。

それもそのはず、このシヨツピング・モールの出資者はこのルイーゼなのだ。もし、このモールが失敗に終われば、ホラント家が出資したお金は回収できないことになってしまう。

そもそも彩が佐田家の土地を買う金など持っているはずもなく、また人間相手に商売をする法的立場もない。前橋中の妖怪が彩のアイデアに賛成したとしても、実際には人間たちが動かなければシヨツピング・モールなぞ建てられようもない。

そこで人間側のお膳立てをしたのが、ルイーゼだった。ルイーゼが佐田家を呪っていた側の人間たちに働きかけることによって、彼らがテナントに入ったり募集したりして、シヨツピング・モールが出来上がっていった。

ホラント家は出資のみならず全体的なプロデュースも行い、話題作りなど様々な仕掛けをへて、このモールが実現したのである。

「しかし、何故こんなことを思いついたのじゃ？」

「さあ、なんでかしらね。田舎生活に、少し飽きたのかもしれないわ」

「妖怪どもを束ねて、朝廷に復讐する準備ではあるまいな？」

「今さら？」

「恨みはあろう？」

「フフ、そうね……でも、あたしにとっても、遠い昔のことだわ」

彩は感慨深げに、一時、目を閉じると首を横に振った。

「復讐よりも、もっと面白いことがある気がする……今のこの世ならね」

そして薄く笑った。

「ほう？」

「この世界ごと渾沌に陥れるほうが、面白そうだわ」

「そんなことを言うておるようでは、まだまだ尻尾を返すわけにはいかんな」

ルイーゼは顔をしかめるとプイと外方^{そっぽ}を向いた。

「フフ、大丈夫よ」

彩がさらに薄気味悪く笑う。

「？」

「あたしたち妖怪は……おまえたち人間の、心の中に、いる」

「……」

「渾沌を望むのは人間の方だわ。あたしはただ渾沌を望む者の心を、そつと後押しする。それだけで、渾沌はおとずれる。そう、尻尾なんてなくてもね」

それでよいのだ。端^{ハナ}から妖怪が身を挺^{てい}する必要など、ないのだ。

人は、自ら破滅を呼び込む「才能」を持っている。

「かつてのあたしは目立ちすぎたわ。自分でなんでもやろうとした。それがいけなかったのね。人にやらせればいいのよ。そしたら、あたしの所為にもならないしねえ」

「いったい、お主になにがあつたのじゃ？」

「別に？ ただ時代が変わつたつてだけよ、妖怪がいた時代から、いなくなった時代へ」

今までは自らの力とその美貌を用いて目的を成し遂げてきた。しかしそれでは主体が彩となつてしまう。利用された者は彩に対して憎悪を向けることになる。

だが、自分が主体になる必要など、どこにもなかったのだ。

「この世に妖怪はいない。そう決めたのは、おまえたち人間よ」

彩はルイーゼを指さす。

「だからどんな不幸が訪れようと、あたしたちの所為になる事はない。すべては人間のせい」
そしてクスクスと笑つた。

「それに、この世界にはびこっている資本主義ってものが、あたしたち妖怪の味方をするわ」

「どういうことじゃ？」

「儲けた者が勝つ世界、それつてつまり欲望に忠実な者が正しいってことじゃないかしら？」

「それは、飽くまでも資本主義のある一面に過ぎぬ」

「いいのよ、その一面だけで踊らされる人間が、たくさんいるんだから」

「……まあ、否定はできぬが」

「その欲望をね、ちょっと刺激してあげれば……ウフフ、面白いことになりそうだね」

「フン、狐め、改心する気はさらさらないか。まったく、長い付き合いになりそうじゃのお」

「その付き合いをさっさと終わらせる方法を教えてあげようか？」

「なんじゃ？」

「今すぐあたしの封印を解くことよ。そうすれば、あんたはあたしから解放されるわ」

「馬鹿馬鹿しい、結局尾が欲しいのではないか」

「そりやそうでしょ、封印されているのは気分が良いものではないわ。けれど、尻尾がそろってなくても、充分に妖怪としての役目は果たせるってこと」

「……なぜ手の内をバラす？ 警告のつもりか？」

「ほら、さっそく疑心暗鬼ぎしんあんきになってるわよ」

「っ！」

「フフフ……今のは言葉のアヤよ。べつにあんたをだませるとは、あたしも思っていないわ」

「油断させようと思っても、無駄じゃ」

「あたしが怖いの？」

「妾に恐怖はない。しかしお主と違って、妾には守らねばならぬものがある。そのために妾は恐怖を知り、わきまえを知り、自らを律リッするのじゃ」

「なるほどね」

「同じように、お主にも守らねばならぬものが与えられておるはずじゃ」

「そうね……解っているわ」

彩の脳裏に、日之出村のことや陸と夕奈の顔がよぎる。

「もっとも、お主であれば簡単にそれらを見殺しにするかもしれないわがのう……」

「当たり前よ、あたしの手に負えなくなったら、さっさと見捨てるわ」

彩はそう言って、手をひらひらと振った。

「お主を改心させるというのは、夢のまた夢のようじゃの」

「妖怪相手に、何言ってるの？」

「ふん、それもそうじゃな、じゃがそれを諦めずに続けることが妾の勤めじゃ。法の者としてお主を預かった以上、お主を導かねばならん」

「失望と後悔を与えてやるわ、あたしに関わったことに」

「結果なぞ誰にも解らぬ。そう、神にもな。解らぬ以上、妾は努力を惜しまん。ただそれだけじゃ」

ルイーゼはそこで一息つく、満足そうに通りを眺めた。

この狐との事業が、狐を改心させるなにかきっかけになればという思いを馳せながら。

* * *

二〇時ともなると、さすがにこの前橋では客はまばらとなった。

もとよりコロナ禍で夜の外出は控えるように行政からはお願いが出されているため、普段よりもさらに客の数は少ないはずだ。

それを見越したのか、鈴鳴屋の店主である凜はレジ周りの片付けを始めている。

その表情から、売上げが好調だったことがわかる。

一方の彩は店の前の通路を挟んだ向かいベンチに座って、すでにワンカップを開けている。

『名月 赤城山』。地酒のようだ。

桜の花びらがライトアップの明かりに舞って、風流な景色を作りだしていた。

「紗雪、今年は春まで残ってもらって悪かったわね」

店の表に出ている商品を片付けようと出てきた紗雪に、彩は声をかけた。

「大丈夫……」

紗雪が無表情のまま頷く。

冬をもたらす神は、桜が咲く前には北へと帰る。

本来なら紗雪はもうとつくにいないはずなのだが、このショッピング・モールの件で、彩に引き留められていたのだった。

冬の神が残っていたからと言って、春が来ないわけではない。いや、かつてはそうだったのだ

が、今は力をセーブすることを覚えた。冬の力をおさえれば、おの自ずと寒さは弱まる。

紗雪はとてと通路を横断すると、桜びらを目で追いながら、日本庭園を眺めた。
ゆるやかな南風が心地よい。

そう、春の風だ。

それから建物の方を振り返る。

明るくて、煌びやかで、そしてオシャレな建物。

真新しい木の匂いが、まだ少し残る。

「このショッピング・モールは、佐田のタヌキも見たかったと思う」

紗雪はそんなことをつぶやいた。

おそらくだが、前橋の繁栄を見ることは、きっとあのタヌキの誇りだったはずだ。

そしてこのモールは言わば彼の置き土産、彼の足跡の一つとも言える。

「フフ、そうね」

結果的に、佐田のタヌキはこの前橋という町に、新しい富をもたらしたのかもしれない。

さらにこの前橋に住む妖怪たちを団結させることにもなった。

もっとも、彼が望んだことでも、計画したことでもないが。

「結局、スズメとタヌキの違いは何だったのだろう」

紗雪が彩に振り返ると、そんな言葉を投げかけた。

スズメとは、あの彩が泊まった、老舗旅館に憑いていた妖怪、福良雀のことだ。

命を賭けてその家をもらったのは、タヌキもスズメも同じだ。

だが、タヌキとその家は滅び、スズメの旅館は今でも続いている。

スズメがイヤツでタヌキが悪い奴だったから、などという単純な違いではないはずだ。

「違いはたくさんあるわ。スズメは家だけでなく、家の周囲や従業員、宿泊客のこともあわせて福をもたらしたことが大きいかしらね」

「魂はどうしてたの？」

スズメも妖怪だ。力を維持するためには、人の魂が必要だったはずだ。

「それは直接聞かないと解らなけど、当主が死ぬときに魂を捧げたか、あとは常連客やその宿で亡くなってしまった人の魂を頂いていたのかもしれないわね」

「なるほど……！」

「お供え物や信心も大切よ。憑いている家に福をもたらすことが、信仰を集めることにもつながるわ。大切なのは、ムリヤリ魂をとるということはしないことね」

「ふむー」

だがそこで新たな疑問が湧いた。

自分や彩はなぜ人の魂を喰らわなくても、存在を維持できているのだろうか？ 冬をもたらすという強大な力を、行使することができるのだろうか？

「それは、あたしたちが神だからよ」

彩はそう教えてくれた。

「伊達に神を名乗っているわけじゃないわ。」

自分が生きるための力を自ら生み出せる者。それが神の条件の一つなのだという。

「氏神だの道祖神だのと人間から祀^{まつ}られてようが、魂喰ったり、坊さん喰ったりして補充しているようじゃあ、神とは言えないのよ」

では神の力の源はどこにあるのだろうか？

「それは神によるけれど、紗雪の場合は……」

彩はそう言って、地面を指さした。

「？」

どういうことか、解らない。

「紗雪の力の源は、地球というこの星、そのものよ」

「地球……！」

「この惑星^{ほし}はたくさんの神を生み、そしてこの惑星に必要な様々な現象を管理させているのよ。

いわば紗雪たちは地球のメンテナーってところね」

季節や台風、火山の噴火や地震などといった自然現象をコントロールする存在は、この地球によって産み出された。つまり紗雪は地球の一部とも言える。

「……ふ、ふーむ」

余りの予想外の答えに、紗雪は何と返したら良いのか解らず、ただ唸った。

自分が地球の一部……と言われてもまったく実感が湧かない。

「深く考えなくてもいいのよ、紗雪。人間だって大きな目で見れば地球の一部でしょ？」

「え？」

「人だけじゃなくて、この地球上に生きる全ては、地球にあるものから出来ているのだから」

「??」

「生物たちがとる『栄養』って全部、地球で生まれたものでしょ？ それらを食べて成長し、子孫を産む。ということは、その生まれた子はまさに地球からできている。そうでしょ？」

「おー……」

「紗雪は地球から直接生まれたところが、人間とは違うわね」

それを聞いて、紗雪は少し何かが解ったような気がした。もっともその「何か」をうまく言葉にすることはできないが……人と自分の違いというのか。

「じゃあ、人も大きな目でみたら、神なの？」

「違うわ。妖怪もね。でも妖怪の方が、少しだけ神に近いかもしれないわね」

「何故？」

「神には存在意義が与えられているわ。紗雪、あなたは冬をもたらすための存在であって、人間

のように会社員になったり芸術家になったりすることはできないし、死ぬこともできない」

「……」

「でも人は違う。自由に生きることができる。それは動物たちもそう。けれど妖怪は少し目的が決まっているわね。あの佐田のタヌキは、佐田家の守護でなければ妖怪ではいられなかったでしょ？ 見方を変えれば、その目的を持つことによって妖怪になれた、とも言えるわ」

「な、なるほど」

「そのしがらみから抜け出せる妖怪は、ほんの一握りよ」

彩はそう言って、ほくそ笑んだ。

ああ、そのほんの一握りの妖怪が、目の前の彩か、などと思う。

「さくゆくさく？ 表の片付けは終わったの？」

店の方から凜の声が聞こえてくる。

「もうすぐ、おわる」

紗雪はそう返すと、そそくさとまた店の前に戻っていった。

自分は冬をもたらす神だが、とりあえず鈴鳴屋の店員にはなれるらしい、などと思いながら。そして、自分はこの惑星^{ほし}の一部なのだということに、何か誇りのようなものを感じながら。

「紗雪」

そんな後ろ姿を、彩が呼び止めた。

「なに？」

彩を振り返る。

「お前が常に必要なとされる時が近づいている」

「まだ、このお店を手伝うの？」

「違うわ。常に冬をもたらすための、よ」

「え……」

「いずれ自覚するときが来る。そのとき、あたしが話したことが解ると思うわ。お前は人間のための神ではなく、この惑星^{ほし}のための神だということを」

そういつて彩は笑った。

その笑みは彩がよく見せる悪巧み^{わるだく}や邪^{よしま}の笑みではなく、優しくそれでいて真剣な微笑みだった。紗雪は彩の言葉の意味がわからなかったが、質問するのはやめた。

いずれ自覚するのなら、その時に全て解るだろう。

「さゆきー!？」

しびれを切らした凜が呼んでいる。

「今戻る」

紗雪は後ろ髪引かれる思いを振り払って、店の中へと戻っていった。

